

245号
新潟発



フェミニズムとは
限らないやさしさ
そして勁さ

—— 白井博子さんを偲ぶ



女ひとり 地方議会に春一番

小川みさ子著

九六年四月、一口五百円カンパの市民票を携え、鹿児島市議会に乗り込んだ小川みさ子。議員になったそのとたん、鹿児島市議会は一人会派への支給を停止。「一人会派がなくなった!」たった一人無所属、無会派での航海がはじまる。たとえば毎月の報酬のほかに議会に出ると一日一万円の日当が出るのはおかしい!と発言したとたんに、保革一致のイジメに。ベテラン議員のイヤガラセ、時には励ましも受け、環境派議員として、市民の健康で安全な生活を守るため日々奮闘。市民の海に抱かれてみさ子の針路はトライアンド・エラー。まさに涙と笑いの議会奮闘記。「女ひとりシリーズ」第2弾! 積み立てた日当八十四万円を「有効利用」した自費出版です。

四六判三〇〇ページ 定価 本体一八〇〇円(十税)

〈あじら〉会員の方には送料と税金分サービス

BOC 出版部

〒160-0022 新宿区新宿 1-9-4 TEL 03-3354-3941 FAX 3354-9014

フェミニズムとは限らないやさしさと勁さ



「フェミニズムとは何か」さまざまな定義があります。

〈あごろ〉は、それぞれの胸に抱くフェミニズムを大切にしている人びとの集まりです。

一所懸命生きていたたくさんの方々に出会った時に、あ、これがフェミニズムだな、と、私たちは互いに学びあってきました。

そのなかでも、特別大きなインパクトを与えてくださったお一人が、白井博子さんです。新潟、大阪、あごろ東京事務局と、各地で活躍されましたが、気丈な信念の方で、心と行動がいつも一致しておられました。一方、どんな時でも心からあふれ出るような笑顔で、その笑顔にいやされた人は、少なくなかったと思います。

その白井さんが、手術や放射線、投薬の苦痛にも笑顔で耐えて、昨年十月十一日、最後までフェミニストらしく、旅立たれました。まだ五代半ば、惜しんでも惜しみたりない別れでした。

この号は、白井さんと中でも深いかかわりを持った新潟の方々が中心になって原稿を集め、編集しました。

白井さんが残されたフェミニズム、「限らないやさしさと勁さ」を、今一度、それぞれの胸でたしかめたいと思います。

245号 目次

白井博子さんを偲ぶ

フェミニズムとは限らないやさしさと勁さ 1

白井さんと女性史と 倉元正子 4

白井さんの涙 細井幸代 7

白井さんのこと 塩沢啓子 8

優しい笑顔 植木知枝 10

白井さんを憶う 阿部和子 11

白井さんへ 笹川幸子 12

白井さんの存在感 小林睦子 13

たった一度の出会いの中で 鈴木由美子 14

白井博子さんとの出会いそして…… 藤田美恵子 15

思い出になってしまったこと 渡辺明子 17

控えめで美しく—— 小泉美奈美 19

お志を継ぎます 澤田和子 20

北京で出会った白井さん 下村美恵子・二宮純子 21

愛しのナイチンゲールちゃんに 芦谷美鈴 22

白井博子様ご遺族様へ 小島サカエ・加藤祐子・森崎民子 24

天国便 白井博子さんへ 高橋ますみ 25

白井博子さんを想う 椎野和枝 27

「地の塩」のひと 斎藤千代 32

イタリア・鳥越・そして新宿御苑の空に今も 真木 泉 34

ホツとする温もり——白井さんは「隅の親石」 芦澤礼子 37

モナリザの 笑顔に似たる 白井さん 荻原有希 38

◆弔辞 いま旅立つあなたに 斎藤千代 39

クラスメイトを代表して 横沢明美 41

◆「白井博子地の塩賞」にご協力を 43

●白井博子さん遺稿●

母の遺してくれたもの（『竈のうた——娘が綴る母たちの歴史』より） 45

私のこの一年（『竈のうた』から一年たって）より 64

小川藤子さんに学ぶ（『小川藤子 うす紫の記憶』より） 68

TOPICS NPO法案施行／「裁判官の政治運動禁止は合憲」寺西判事補に最高裁が戒告 ほか 71

集会から「世界人権宣言五十周年」記念集会／「安保」と国民投票 ほか 75

気になる英語 セルフ・ハンディキャッピング 奥川 睦 80

随想 グラン高原の林檎 飯岡祐保 82

沖縄から 基地やならん！ ちむぐる行進／「基地の県内移設」の撤回を求める声明 ほか 86

語りかけたいあなたへ 17 NO MORE 核実験 大里知子 88

あこら読書室 ナシヨナリズムとジェンダー 90

あこら試写室 阿波根昌鴻・伊江島のたたかい——教えられなかった戦争・沖縄編 94

あこらのあこら 96

白井さんと女性史と

倉元 正子

丁度、一年になります……。あまりに早い「別れ」でした。この半月ほど、ずっと白井博子さんとの想い出をたぐり寄せていたけれど、なぜかその始まりが思い出せません。いつものように、自然体での出会いだったからだと思います。

新潟女性史クラブが、「母の歴史」を書くことに取り組んだのは一九七八年四月からですが、その途中からの入会だったようです。母を書くことに躊躇したり、書けなくなったり、書く意味を問いかえしたりする会員のなかにあつて、白井さんの原稿は比較的スムーズに提出されました。

白井さんと女性史の関係は、船橋市の公民館学習にさかのぼります。母たちが歩いてきた道こそ近代女性史と、母を書くことをすすめた講師の言葉に「強い印象を受けながら新潟へまいりました。そして新潟女性史クラブと出会い、思いがけなく『母』を綴る機会に恵まれましたことは本当にありがたいことでした」と、機関誌『光と陰』に書いています。白井さんの中には、しっかりと母を書く意味が収まっ

ていて迷うことがなかったものと思います。

しかし、原稿の批評、視点の確認をする「合評」の時、ホロホロと涙した白井さんの姿は今でも目に浮かびます。お母さまの病氣、死、合成洗剤に冒された手荒れが「母の癌の誘因の一つになった」というくやしきの涙でもあったと思います。いつも静かな人のほげしい心の動きに、皆言葉もなく彼女の氣

持ちの収まりを待っていました。何回かの書き直しの後、白井さんは「母の遺してくれたもの」と題して『竈のうた——娘がつづる母たちの歴史』に収めてくれました。そして一九八一年三月出版の直後、『竈のうた』を持って大阪へ出発されたのでした。

その後、白井さんの作品中「私の進学と就職」の章が『高校生の現代社会ノート』（帝国書院）に掲載されることになりました。

「片親の子女は採用しない」高卒の就職状況のなかで、「自分に実力をつけ、自分の道は自分で切り開かなければなりませんでした」と、薬学を専攻し「親からの仕送りも受けず、奨学金とアルバイトだけで四年間を通した」白井さんの青春期の生きかたが、高校生の進路問題を考えるための資料として採用されたのでした。思いがけない反響を、さっそく白井さんに電話したことも懐かしく想い出されてきます。

大阪へ行ってもなく女性史の研究を始めたという、うれしそうな便りが届き、行動の早さにびっくりしました。船橋から新潟そして大阪へ、白井さんと女性史のかかわりは途切れることなく繋がっていました。「女性史を学び、『母の歴史』を書いたことは、女性である私自身の未来の道標をみつければ、立ち立てるためであった」と、大阪での女性史学習が認識を確かにしてくれたようでした。そして「学んだことを、常に自分の生活にひきつけて点検しながら、意識の変革をはかっていきたい」という白井さんは、「女も労働し続けることが当たり前、それが社会参加の中核をなすもの」と、薬剤師として働きはじめました。

再び船橋市へ戻ってから〈あごろ〉の活動参加のことが手紙に書かれてくるようになりました。お互いに〈あごろ〉会員という共通の場をもてたことが、さらに二人を近づけたようでした。しかし、読書

会員の域にとどまっている私に比べ、〈あごろ〉へ関わりだした白井さんは、どんどんたくましく、意識がとぎすまされていきました。

そんな白井さんが薬剤師としてのステップアップと〈あごろ〉への関わり方の間で悩んだ頃、長い手紙や長い電話をくれました。〈あごろ〉の将来も含めて気遣う、その深い揺れ動きに、私は言葉のみつからない申し訳なさを今も思います。

九六年春、「治療方法が決まらない」という手紙に、もしやと不安をもったことが現実になってしまいました。しかし病氣中の手紙も、再度放射線治療を行うという後に続けて、ペルー事件の顛末を「国家によるテロではないでしょうか」というふうに、社会に目を向けた姿勢は変わらないものでした。また、地域史の執筆依頼を受けたが女性が一人で心細い、と愚痴った私に「女性が一人らしいとプレッシャーをお感じになるのは、あなたらしくないと思います。それこそジェンダーにとらわれている考えだと思います」と常にない強い調子に、身の引きまわるような励ましを受けました。厳しい病いに負けまいとする一方で、自由に活動できない身体と心のいらだちを垣間見る思いがし、白井さんの本当の動きを感じるといっしょに、むしろに悲しくなったことでした。

「二人ひとり、みんなみんな、かけがえない存在であることを痛切に感じます」「せめて二十一世紀は迎えたいなあと願っています」と書いてきた白井さん。あなたのやさしさと、しなやかな動きと、無念さと、変わらない友情を「白井さんの遺してくれたもの」として、受けとめています。

あなたは、きつと眠ってなんかいないで、「二〇〇〇の風」になって吹きぬけているのでしょうか……。
風を感じるとき、あなたを感じることにはましよう。

(新潟市)

白井さんの涙

細井 幸代

白井さんのことを思う時、必ず私の頭に浮かぶのは、涙をポロポロと流しながら、合評会で原稿を読んでいた時の姿です。

それは二十年近く前の話であり、私たちのサークル〈新潟女性史クラブ〉で娘の目からそれぞれの母親のことを書き、後に『竈のうた』として出版しました。その一連の過程での一コマでした。入会して日の浅かった私は、白井さんがお母さんを亡くされて間もない生々しい思いの中で書かれたことを知らずにおり、大変驚いてしまったのでした。

あなたの文体は、すべて「ございます」調でした。それに対し、白井さんのお人柄にびつたりだとの意見が相つぎました。

本の出版直後、あなたは大阪へ行ってしまった。まだ小学校の低学年くらいに見えたふたりのお嬢さんを連れて、大和デパートの近くで見かけた数日後のことだったと思います。

その後、ポツポツとお会いする機会が何度ありました。「全国女性史のつどい」のあった江の島や山形市であったり、世界女性会議の折の北京空港であったりしました。あわただしく言葉をかわすだけのこともあれば、ゆつくりと食事をし、みんなでワイワイと時の過ぎるのを忘れたこともありました。しかしそこにいつもあったのは、絶やすことのないおだやかな微笑と、鋭い批評する力に裏打ちされた考

えを、しっかりと口にする姿でした。とつくに新潟を去っているながら、いつもどこかで私たちとつながっていました。

一昨年の夏を迎える頃だったでしょうか。まだ若いあなたが、重い病氣にとりつかれてしまったことを知りました。何か言葉をかけてあげたい気持ちと、心のうちにそっとしまつてあなたのことを思いつづける方が良いと思う気持ちが交錯しました。どちらも重く苦しい問題でした。

私は、今六十歳を目前にしていますが、五十五歳を過ぎた頃から「死」について考えることが多くなりました。最近では、折あるごとにそれが頭をもたげ、追いつ立てるように、これからの日々をどう生きるのかを、私に問いかけます。そんな中にいる私があなたのことを考える時、突然命を奪われてしまったあなたには、それを少しづつ受けとめていく、時間的精神的余裕を持てなかったであろうと想像します。私の胸は、ほんとうに痛くなってしまうのです。

(新潟市)

白井さんのこと

塩沢 啓子

白井さんと出会ったのは、『竈のうた』として明治・大正・昭和を生きた母たちの聞き書きを出版しようとしていた時だった。一九七九年か八〇年のことだったと思う。

母たちを「さらし者」にするような後ろめたさ、無収入の身で出版費用を捻出しなければならない心

苦しさ……。母を女性史の視点で見ることにしんどさに加え、現在なら悩まなくても済むことまで話し合い、時にため息をつき、思い切るといふ連続だった。

他の人の原稿がほぼ出揃った頃に、白井さんが途中参加の形で入会された。

記憶の中では例会での初対面と原稿を読ませていただいた時の時間のずれが殆どない。おそらく一気に文章にされたのだろう。戦争に翻弄されたご両親、中国で亡くなられたお父さん、職業を持つことは自尊・自律の条件であると繰り返されたお母さん。

「娘たちに伝えておきたいという思いで綴ってまいりました」と本文にある。

「母の遺してくれたもの」と題されたその合評では、六八年に亡くなられたお母さんへの思いが涙になってあふれ、絶句してしまわれたのを思い出す。

『竈のうた』出版の直後、お連れ合いの転勤で大阪に行かれ、新潟で一緒にしたのは本当に短い期間だった。その後、仕事を始められたり、〈あごろ〉で活動されていることなどを伝え聞き、母たちの世代の遺産をしっかりと受けとめておられるのを知った。ご病氣になられてからも、学習の場を求め続けられたと聞いているし、九七年の『小川藤子 うす紫の記憶』では、ご自分と故人を重ね合わせた文章を寄せておられる。

一九五三年までの十年間を中国大陆で過ごされた体験や、戦争で傷ついたお母さんと過ごしてこれたことが、常に広いつながりの中で考えることをさせたように思われてならない。

九七年夏、松本で緑山が描いたデッサンを見た。生き生きとしたその眼差しに、白井さんのことを思い出した。ご冥福を祈ります。

(新潟市)

優しい笑顔

植木 知枝

白井さんを想いおこすといつも優しい笑顔が浮かんできます。「竈のうた——娘がつづる母たちの歴史」で白井さんは「母が遺してくれたもの」を唯一「〜でございます」「〜てまいりました」という文体で書いています。

その文体は白井さんそのものなのだなということが、その後の白井さんとの数えるほどの再会のたびに思いを深くしたのでした。

『竈のうた』を出版後まもなく大阪へ転居となり、お別れに見えた時、「娘のランドセルにこの本をつめてゆく」と語り、新潟から離れた土地でも共に模索しあったことを大切にしてくれるんだなあと、うれしく心強く思ったものでした。実際、大阪では女性史学習グループに積極的に関わり、記録集を私たちの会に届けてくれ、私は大阪でも女たちは女の生き方を模索していることを実感したものでした。「竈のうた」から一年たって——私たちの活動記録集』に仕事を始めた白井さんの寄稿があります。仕事に対してジレンマを感じたけれど「矛盾を生きることが人生」と思い定めて新たな方向をめざし勉強の必要を語っています。未来をみつめて、自分の納得できる生き方をなさってるんだなと思ったものです。

その後千葉に移られてからだと思いますが、〈あごろ〉で白井さんの署名入り記事を読ませていただくこ

とたびたび。

九四年、「第六回全国女性史研究交流のつどい」（山形）、九五年の北京NGO女性会議、九五年日本女性会議（新潟）の各々の場であわただしいなかお会いしましたが、その中でも強く印象に残っているのが、山形でお別れた時の白井さんの姿です。駅前で手を振りながら私たちから去ってゆく白井さんの目は涙でいっぱいでした。その時白井さんの胸に何が去来したのでしょうか。

（新潟市）

白井さんを憶う

阿部 和子

私が白井さんと再会できたのは、一九九四年、山形市での「全国女性史研究交流のつどい」に出席した時でした。お会いできるとのことと楽しみにして出かけたものでした。

白井さんは、相変わらず華奢なお体にやさしさを満面に浮かべて、私たちの前に現われました。そして昨日まで一緒に居たかのような、元、机を並べていた時と同じように親しく、一人ひとりに言葉をかけて、新潟女性史クラブの一員であるかのように、肩を並べて席に着きました。宿泊が一緒でなかったのが残念でしたが、大会が終わって帰途につき、最後の最後まで別れを惜しんで、ホテルの近くの店の前あたりにたむろし、誰ひとり先にその場を離れようとせず、いつまでもぐずぐずしていたあの日のことを昨日のことにように、思い出し懐かしんでいます。

良い人ほど、先に逝かれると聞いたことがあります、ほんとに惜しまれてなりません。白井さんがこの世に居られないとは、どう考えてもそう思えない私です。何時の日かまた、ひょっこりと目の前に現われるような、そんな気がしてならないのです。

ご冥福をお祈りいたします。

(新潟市)

白井さんへ

笹川 幸子

昨年の五月、白井さんが再入院されたという報せを女性史クラブで受けました。そのころ私は物理的にも精神的にも女性史を学び続けていくことにきっちりとした整理がついたところでしたので、「やっとうにか門の前に立つことができた者です。いつかきつとお会いしてお話しできることを願っています」といったようなことをお便りしたと思います。

残念ながら私は、白井さんの文章を拝見することでしか接することができなかったのですが、どの文章から浮かび上がる優しさ、穏やかさ、そして芯の強さやしなやかさは、白井さんのお人柄そのものを十分に伝えるものと思っています。

このたび『竈のうた』から一年たって」という記録集を読み返してみても、これはちょうど白井さんが私と同じ年齢のころに書かれたものだということに気がきました。そしてその内容が、私自身のこれ

までとこれからに共通するものを見つけて胸が突かれる思いがしています。転勤族の妻であること、おやこ劇場や生協といったことば、そして四十歳にして再就職。働きながら学ぶこと。病状が悪化しても活動と学習に対する意欲を少しも失わなかった白井さんの、きつと心の中の基調低音だった反戦・平和への思い……。

お会いして語り合うことはかなわなかったことですが、新潟で白井さんが私たちに残していつてくださったことを大切に、私も女性史の学習をしてまいります。そして、故郷を出てここでやつと自分自身をつかまえることのできたようなこんな私が女性史を学ぶことを、白井さんはきつとにつこりと喜んでくださることだろうと思っています。

(新潟市)

白井さんの存在感

小林 睦子

私が出会った白井さんは、『竈のうた』から一年たった新潟女性史クラブ会員のそれぞれの歩みを綴った中での、静かな、ていねいな語り口、芯の強さを感じるイメージとともにある。『雪華の刻をききむ』出版後から参加した私は、すでに新潟から離れていた白井さんから、クラブのほかのメンバー同様、大きな存在感を受けた。

薄絹をふわつと軽くまとい、風を受けながら、一步一步自分の道を切り開き、歩き、階段をゆつくり

上る確かな足どり。そんなふうに、着実なもの、確かなものをしっかりと選び取りながら誠実に生きた人だと、ほんの少しのつながりしかない私にも思える。

「日本女性会議95にいがた」が新潟で開催された折、みんなで会った白井さん。同じ年、第四回世界女性会議（北京会議）のNGOフォーラムへ参加していた白井さん。写真パネルをもって掲示会場をたずねまわり、建設途中の建物でようやく場所を作ったときの心細さとともに、今も思い出される。

そんな白井さんが病に倒れたことを聞いたとき、「どうして？ あんなに一生懸命な人がなぜ？」と、不公平というか無情というか、割り切れない気持ちになった。病氣と闘いながらも活動が続けた強靱な精神力。二、三度しか会っていない私が女性史クラブの写真を送ったとき、「相変わらず週四日の通院で一進一退、いつまで続くぬかるみぞ、といった感じです」と近況を送ってよこされた。きつと、筆を持つのも苦労されたのだろうか。まだまだ、教えていただきたいことがたくさんあったのに。私にとって白井さんは、懐かしさと勁さ、あたたかさの大切なことを静かに残してくれた人でした。（新潟市）

たった一度の出会いの中で

鈴木由美子

白井さんにお会いしたのは、新潟で日本女性会議があった九五年、その会場でのことでした。

まさかそれが最初で最後になるとは思ってもみませんでした。私は、私たち新潟女性史クラブの『窓

のうた』であの丁寧な文で「母」のことを書いた人がこの人かと思ったのです。

その席は、久しぶりにいらした元サークル会員の歓迎のために借りた一室でした。ところが、そのときの私たちは、いつもの学習会のように、てんでに批判や意見や感想を、みんなでかなり激しく話し合っていました。白井さんはそんな私たちの話をすぐに的確にとらえて、話の中に簡単に入って下さったのでした。そのうえ、話を広げて、いろいろな情報も加えて下さるから、とても意味が深まって、気持ちのよい場になったのです。

その華奢な外見とは違う頼もしさに、ああ、この人がずっとサークルにいらしたら、こんな雰囲気だったのかしらと、そう思っていました。

本当に残念なことでした。ご冥福をお祈りします。

(新潟市)

白井博子さんとの出会い　そして……

藤田美恵子

私が白井さんと初めてお会いしたのは、たしか一九九二年の夏、私も世話人の一人であった〈戦争への道を許さない女たちの会・新潟〉が主催した「つどい」の時でした。

『あぐら』の編集者、斎藤千代さんから湾岸戦争のビデオを上映していただき、お話を聞く、というのがこの時の「つどい」の内容でした。

白井さんは、斎藤さんと一緒に来られたのです。「つとよい」の後、反省を兼ねた私たちとの懇親会の席で、私は白井さんが以前新潟に住んでいて〈新潟女性史クラブ〉の会員でいらっしやったということを知りました。

そしてその後、新潟女性史クラブ発行の『寇のうた』のなかで、白井さんの書かれた「母の遺してくれたもの」に出会いました。「戦争」について熱っぽく語られていた原点がここにあったのだということ、この時納得したものでした。

その後、国立婦人教育会館で開催された夏の女性学講座や大阪市婦人会館での催し物でお会いしているうちに、お互いに〈あごろ〉の会員であるということや、関心事が共通だったりして、ずーっと前からお友達であったような親しさでお話をしていたように思います。

そして、第四回世界女性会議が開催された九五年には北京空港でお会いして、一緒に写真も写したのです。今となつては貴重な写真となりました。

次にお会いしたのは、その年の十月十一日、私も主催側の一人としてかわった「日本女性会議'95 in にいがた」に白井さんが参加して下さった時でした。「交流会」が終わって、実行委員である私たち数人と白井さんも加わって「三次会」で楽しくおしゃべりをしました。

それから間もなく、「お体の具合が悪いらしい」というお話を耳にし、心配していましたら、訃報に接することになってしまいました。

出会いからほんの三、四年の短いお付き合いでしたが、いつまでも心に遺る人として白井博子さんを私は忘れないでしょう。安らかにお眠り下さい。（新潟市）

思い出になつてしまつたこと

渡辺 明子

十数年、いえ、もう二十年にも近い月日が流れようとしているのですが、そのころ私たちはみんな若くて「理性こそすべて」と信じ、そして、自分の中にもその確かな理性があるとまだ信じられる時代でした。せつせと新潟中央公民館に通い、『電のうた』の上梓に向けて夢中だったのです。十数名のどの女性も一粒ずつ、それぞれが輝く存在でした。その中であつて、白井博子さんの、あの理知的な額と、うれしいことがいっぱいありそうなのにこやかさを思い出すのです。

白井さんにとつて新潟は、御主人の転勤に伴う、おそらくそんなに長くはなかったはずの滞在地でし、白井さんが新潟を離れられるころ、私も主人に伴い転出となりましたから、私たちは、人生の交差点でちよつと立ち話をした程度のことだったのでした。

白井さんは、やや内股で、子育てに関すること、PTAや生協その他を八面六臂。走っているという印象を与えずに、にこやかに活動されていて、くたびれ屋の私は、ひたすら尊敬していました。子育てを楽しむ、生活のさまざまな面を科学しながら社会生活をも楽しんでいらつしやるようでした。

ある会で、たぶん、永遠のテーマである「子育てと女性の自立」についての分科会だったのでしよう。白井さんはゆつたりと発言なさいました。「『流行の洋服などは着られませんか』とさまざまなテーマがあつて、家庭にあつて子育てをしているということは、とても意味深い……」というような内容で

した。参加者の間にホッと落ちつきの空気が流れました。すばらしい笑顔と確信に満ちたまなざしが会場を包んでしまったのでした。私たちは皆、多少なりとも、子育てをしていて、いつか社会から肩すかしを食ってしまうのではないかと不安感を打ち消せないでいたのです。そして、私はもちろん、たぶん、皆、自分の衣服にまでお金をかけられず、手持ちのものを着まわしていました。

『寇のうた』の白井さんの章のゆったりと美しい文章を思い出します。出版に向けての合評会で、その「ございます体」が問題になりましたが、私はすぐに擁護いたしました。たぶん、誰かから意見が出るかもしれないという予感がありましたから、私は絶対その章の文体は守ろうと心に決めていたのです。中国東北部で、そして日本に帰還されてからと、余儀なく苦しい道を歩まれた白井さんのお母様の雰囲気がおのずからしのばれる文体だと思っていたからです。太宰治の『斜陽』の「お母様」の香りがありました。

白井さんが中国からの帰還者であり、そしてほとんどご自分の力で学業を修められたこと等、私には驚異でした。私が学生時代にすれ違った人たちの中にも、白井さんと同じ立場の中国帰還者が意外にも多く、後年になってその方々の著書や経歴書きの中でそのことを知ったのですが、その方々が皆、優秀で、白井さんと同じようににこやかでゆったりした印象があったのは不思議です。中国大陸の魅力でしうか。白井さんが「中国では「グスターリン様万歳」と叫び、帰還に当たっては、日本を解放するのだとの思いを持って上陸した舞鶴は、とても美しかった」と話された時には、とても驚きましたが、同時に、文化の異なる世界が本当にあるのだと思い知りました。以来、折にふれ中国のことが気になるのです。昨年、十月か十一月、上越教育大の中国人留学生に中国語を教わっている時、中国の主食が話題になりました。私は白井さんが語っておられた「フアーゴ」を思い出し、たずねたところ、鄧麗涛の顔がう

れしように輝いて、それが「発糕」であることを教えてくれました。その無心の笑顔が白井さんに似ているナと思ったその頃、白井さんはもう中国の大地さえ見わたせる星の国に旅立っておられたのですね。白井さんが、お母様への鎮魂の章を結ばれたその言葉で、深く、聡明でいらった白井博子さんを偲び、追悼の文を結びます。 合掌

(新潟県・妙高高原町)

控えめで美しく――

小泉美奈美

博子さんと巡り合ったのは一九七九年(昭和五十四年)晩春であつたと思う。新潟音楽文化会館でのコーラスグループに参加したとき、博子さんはメソのパートにおられた。じきに同じマンシヨンの佳人とわかり、行き帰りを共にするようになった。マンシヨンと会館は割合近くにあり、信濃川に架かる昭和大桥をお喋りをしながら歩いて行つた。この時の語らいが、私が新潟女性史クラブへ参加するきっかけになったと思つてゐる。

ある時、なんで福祉会館に行つたかは覚えていないのだが、そこで市民歌「ぐみはら」だつたと思うが、みんなで歌つたとき、音程の確かさと美しい声に聞き惚れたことを思い出している。

博子さんは「あなた様はどう思いますか」「あなた様はどうなさいますか」と育ちの良さを伺わせる丁寧な言葉を使つてゐた。そのことは『寵のうた』で博子さんの生い立ちを知つてなるほどと納得したも

のだった。

控えめで、かといって隠することなく何時も穏やかな平常心で居られたようにお見受けしていた。直接のお付き合いはそう長くはなかったが、懐かしく思うお一人であり、今も時々思い出している。(青森市)

お志を継ぎます

澤田 和子

あなたと初めての出会いは一九八一年大阪市立婦人教育会館での「婦人問題講座」でした。二年間の長期講座で共に「近代女性史・女性論」を学びました。今あなたのことを書くためにその時の研究論文集を広げています。当時三十九歳のあなたは、応募動機に「十一年間の主婦としての重みを大切にしたい」と書いておられます。明治以降の近代女性史の中で十五年戦争にどのような女性もかわったか、加害の視点に重きを置いた学習でした。

わたしはそのとき『あごろ』に出会いました。あなたは新潟の時から会員だったのでしようね。終了後有志で〈夕陽丘女性史グループ〉を結成し、女性と平和をテーマにご一緒に運動をしました。今も私たちは〈戦争を考える会〉などは継続しています。

五周年を記念して寿岳章子先生を迎えて講演会「日本語と女のかかわり」を開催したとき、講演内容のテープ起こしをあなたは一人で引き受けてくださいました。それを私たちは冊子にまとめ、今もグルー

プの紹介に使用し、その都度あなたのことを思い出して感謝しています。

おつれあいのご転勤で千葉に行かれ〈あごろ事務局〉にかかわってくださり、北京世界女性会議に参加され、多くの〈あごろ〉メイトのお世話をなさったと聞きました。私たちのグループが十五周年を迎える前に大阪に永住されることになり、またグループに戻って頂けると、みんなとても喜んでいましたのに入院されたと聞いてびっくり。私も二、三度お見舞いに行き、重病であることを知りました。しかし病床でもあなたはにこやかに、泣き言を言われず「本が読めないのが辛い」と漏らされただけでした。あなたが亡くなれたことをお聞きした時の驚きと悲しみ、斎藤千代さん、山際美代子さんと通夜と告別式にご一緒させていただいて、あなたのやさしいおやかな写真を見ながらのことは言葉になりません。また涙が湧いてきます。もう一年たったのですね。

グループは、あの時解散をしようかと思いましたが、あなたの言葉を思い出し、十五年のグループの活動の重みを大切にして、二十一世紀が平和で差別のない社会の到来であることをめざしてささやかな運動を続けます。見ていてくださいね。

(大阪市)

北京で出会った白井さん

下村美恵子・二宮純子

白井さんに初めてお会いしたのが北京女性会議の旅の始まり。床の抜けそうなオンボロバスの中でし

た。白井さんは夜中までグループのためにゴタゴタしたことを片づけながら、笑顔で、しかもエレガントで、その魅力は忘れられません。

エキセントリックな旅をご一緒し、また私たちのワークショップにもご参加いただいて、白井さんの人となりに触れさせていただきました。その時、高橋ますみさんから「あごらのナイチンゲール」という愛称がおりだと聞いて、おおいに納得した覚えがあります。そして、それが最後の出会いであったことを知ったとき、信じられないような命のはかなさを実感しました。

ご本人にお届けできなかった写真の特集に添えていただければと思います。ご冥福をお祈りします。

(名古屋市) (写真は44ページに掲載しました)

愛しのナイチンゲールちゃんに

芦谷 美鈴

白井博子さん、私はあなたと北京会議で出会いました。出会いはそのときの数日間だけだったのですが……。

私たちの北京会議は、知る人ぞ知る、大変な旅となりました。中国到着の当日、宿なし雀となった美女集団は、ぐるぐるぐる真夜中の中国をあちこちたらい回し。不安と恐怖と不信感で、気が変になりそうになった人も出たくらいです。まるで、現実のものとは思えない映画のワンシーンにワープした

ような時間でしたね。

そんな真つ暗な劇画のなかで、黙々と裏方に徹して作業をこなすあなたの姿に、戦場で我が身も振り返らず戦士たちを看護したナースの姿を見たのは、私だけではないはず……。

だけれが、思わず「ナイチンゲール……」とささやき、あなたのニックネームは瞬時に決まりました。私なんか、あなたの本名も知らずにいたくらいです。

さて、愛しのナイチンゲールちゃん、あなたとは、帰国後、何回かおはがきごっこをしましたね。そうそう、私は愛のおはがきごっこのみです。

あなたが、そんなに悪いなんて知らず、いつもノーテンキなパッパパーのはがきを書いては、あなたをびつくりさせたものです。

手術直後も、「大阪に来たんでしょ？ 近くなったよね、○月○日の講座に来ない？ 会いたいよォ」なんて書いて、ほんとに蟹^{ひんしゅく}もんだよね。

あなたから「ごめんなさい、もうすぐ手術で、今回は行けないわ」とお返事が来たときにや、ほんとに自分のノーテンキさを反省したものです。

愛のナイチンゲールちゃん、今どうしてるかなあ、また、誰かの裏方に回って、せっせとやってるのかなあ……。私の友人が山から落ちて、そっちいつちやったんだよ、怪我してると思うから、出会えたら介護してやってね。歌のうまい奴だから、お札に歌を歌うと思うよ。

じゃ、またね。

(鳥取県八頭郡)

白井博子様ご遺族様へ

小島サカエ・加藤祐子・森崎民子

柿の葉の彩りに、秋を感じる候、博子様の訃報に接し、心乱れるまま、お悔やみのペンをとっております。

私たち三人は〈あごら九州〉の会員で、二年前北京で開かれた世界女性会議に参加しました折、博子様にひとかたならぬお世話をいただきました。中国という、日本とは政治も社会もまるで異なる国に出かけ、あごらツアーもホテルをさがして真夜中すぎまでバスを走らせるという大変な体験をいたしました。が、そんな中で、みんなの意見を十分に尊重して、あれこれ調整役を一手に引きうけてくださったのが博子様でございました。

九大のご出身とお聞きして、私たち福岡から参加しました〈あごら九州〉のメンバーには、ひどく身近に感じられましたし、ソフトな接し方で、いい解決策をみつけてくださいますので、みんなが、とても頼りにしたことでした。

去年の今ごろだったでしょうか。ご病気のことは耳にいたしましたが、治られるものとはかり信じておりましたので、お見舞いも失礼してしまいました。ご存命中に、北京でのお礼を、きちんとお伝えしておくべきでした。残念です。

博子様五十六歳のお別れは、ご家族のみなさまにとつては早すぎる、早すぎる……十回、百回くり返

しても、やっぱり早すぎるとしかいいようのないお別れだったろうと、お心のうちをお察しし、哀悼の念を禁じえません。私たちが、〈あごろ〉に関わっているかぎり、いえ、女であるかぎり、折にふれて、今は亡き博子様を懐かしみ、尊敬をこめて、思い出すことでしよう。

近くでのお参りはかないませんが、心からご冥福をお祈りいたします。合掌

一九九七年十月二十三日

(福岡市)

天国便 白井博子さんへ

高橋ますみ

今年の夏はなかなか終わりにくく、むし暑い日が長びきましたが、ようやく秋らしくなまってまいりました。御地はいかがでしょうか。いつもうららかであなたの大好きな花々が咲きみだれ、あなたは、忙しさに追われることもなく、充実した日々をお過ごしでしょうか。

紫式部さん、平塚雷鳥さん、山川菊栄さん、ローザ・ルクセンブルグ、バージニア・ウルフ、ポーボワールの皆さまにも、もうお逢いになりましたでしょうか。

新潟、大阪、船橋、外国、大阪と、あなたの住所ご変更の軌跡が私の住所録に記されています。どこでもあなたは生き生きと充実した日々を享受していらっしゃっているようでした。

私たちが出会った〈あごろ〉も不思議な空間でしたね。ギリシャでの古代民主主義発祥の地にちなんで名付けられた柵のないひろば。

お互いに生まれた時代が少しずれていたら私たちは出会えなかったでしょう。ほんの少し前の世代の日本の女性たちは、地縁、血縁にがんじがらめになっていて、時と場所を超えて、女縁でつながることは、めったになかったようです。ところが〈あごろ〉というひろばでは、北海道も九州も日本列島のみならず、地球規模で集い、何のこだわりもなく本音で語り合うことができました。

その気になれば、いつでもおしゃべりできる間柄と信じ込んでいましたから、安心して、じっくり話し合う機会を持つとはやることもないと思っていました。

一九九五年北京での第四回世界女性会議。あなたは〈あごろ〉グループの中心スタッフとして大忙しのご活躍ぶりでした。

私たちは、中国に着いたその日から、ワクワクするような豪華な冒険の旅の展開でした。

予約してあった宿舎には入れず、真夜中に雨もりのするバスにゆられて、未明まで中国山中をさまよえるなんて、予約注文したって、かなえられることはありません。

旅の魅力はハプニング。その次々と起こるハプニングの輪廻の中で、あなたは優雅に身をこなし、決断し、メンバーを説得しまとめていらつしやいました。参加者の中にはだんだん疲れが重なりイライラをつのらせる人もいましたが、あなたは、あわてず、動ぜず、たおやかでした。強いことばも、態度もなく、相手を受容しながら状況を説明し、同じ側に仲間を引き入れていきました。

私は、透明なベールを通して見るような思いで、あなたから何かを学び取ろうとし、その芯の強さに

圧倒されておりました。

〈あごろ〉の拠点を天国に創設するのは、もつとずっと後でいいと私は想っております。国境を超えて、地球規模で張りめぐらした〈あごろ〉のネットワークに、生も死も超えて私たちはつながろうとしているのでしょうか。時差を超えた〈あごろ〉拠点会議で、またお逢いしましょう。つもる話がたくさんあります。私には、もう少しこちらで時間をください。〈あごろ〉継続の手だてをみんなで、力を合わせておかなければなりません。

では、また。 一九九八年秋

(名古屋市)

白井博子さんを想う

椎野 和枝

さわやかな秋の風を感じるなかで白井博子さんを想う。

私にとって白井博子さんとの出会いは、東洋大学の特別研究会の『新しい人間関係の創出課程』についての実証的研究のために、大阪市立婦人会館に神田道子教授等と出向いた時であった。初対面であったがお会いたした目的が、多方面で活躍する女性の動きと新たに創りつつある人間関係の内容を知りたいということだったので、限られた時間内とはいえ、どんな学習内容を、いつからどのようにしてこられ

たかをお聞きするうちに、白井博子さんのこれまでと現状、そして人柄をよく知ることができた。その当時〈夕陽丘女性史グループ〉のメンバーとして、薬剤師としての勤めの傍ら、仲間と関連な活動をなさってきたようすがうかがえたのであった。

話はさかのぼるが、一九七四年頃の千葉県船橋市にお住まいの頃、上の子どもを幼稚園に行かせたかったが、幼稚園が少なく入園できなかった」と話し、そこで自主保育をしようと仲間をつくり、幼児教室を立案している。現実の問題を解決しながら、親も子ものびのび育つための共同学習の場をつくり出すという、積極的な人であった。

この先続く夫の転勤に伴う度重なる転居の中でも、落着く先々で驚くばかりの速さで自分の求める学習の場をみつけて、自分と呼応する仲間と出逢っている。

長女が年長組の頃、新潟市に過ごした三年間は〈新潟女性史クラブ〉の仲間たちとの厚い絆が生まれている。新潟の倉元正子さんたちとの出会いは、白井博子さんのそれからの歩みの基となっているといえる。新潟女性史クラブのみんなで真剣に話しあい学習を積み重ねた結果生み出された聞きがき『電のうた』は、一冊の本になった。「祖母や母の歩いた道が女性史の道」と気づき、自分たちの身近な人びとの人生を自分たちの力で綴った。「著作の完成もうれしかったが、仲間との平等な関係がそれにもまして大切だった」と語っていた言葉から、白井博子さんの人との関係のもち方がうかがえる。

本の出版は白井博子さんの書いた『自分の道は自分で切り拓かなければならない……』といった旨の箇所が、高校の社会科副読本に引用されるといふ大きな喜びを、白井博子さん個人にも、女性史クラブみんなにも与えた。

新潟から大阪への転勤は四月に移動だったが、五月からの大阪市立婦人会館の第一回婦人問題基礎講

座にはもう応募して、一期生になったという。白井博子さんが「その時、まだ市立婦人会館がどこにあるのかも知らなかった」と笑顔で何気なく話した表情が浮かぶ。同じ転勤族として、聞いている私の方が驚いてしまっていた。

二年間の講座のあと〈夕陽丘女性史グループ〉が発足した。白井博子さんも参加して、澤田和子さんから大阪のエネルギーな女たちと、女性の自立を目標に仕事も社会活動にも励んでいる。会の五周年記念には公開学習会〈戦争を考える会〉で司会役も勤めた。

家庭での子育ては、従来からの世間のいう「女らしく」育てるのではなく、女の子男の子のわけへだてなく育てようと思ってきた。夫との生活も、家庭は二人で築くものとして、たてまえでなく本音で生活したいと言い、自分の立場や願いを伝えていくようにしたという。

大阪でのお話を伺った折、明るく美しい表情で「薬剤師としての今の職場は、夫が目につけてくれた新聞の切り抜きに始まった」とエピソードを披露して「何より夫の理解と協力がうれしかった」と述べた。

その後また関東に戻り〈へあごら〉の人たちとの深まりを経て、九五年九月には北京会議へ。

私の所属する〈女性の学習情報をつなぐ会〉が、同年十二月に東京ウィメンズプラザで開いた会合にも早くから出席の便りが届いた。「女性の社会参画する力をつける学習」のテーマでシンポジウムと分科会を設けたが、分科会での白井さんの発言は体験に裏うちされていた。「平等の関係をつくるには、誰もが意見を言い納得しながら時間をかけてすすめた。平等にものごとを決めるのは時間がかかると実感している」と話してくれた一場面も忘れられない。

各地で、講座やひろばに集まったメンバーが、これからの女性のめざす目標を共有して地道に堅実に

歩みながら根を張っている。その一方で転勤を余儀なくさせられる女たちもいるが、主体的に生活していると、転居しても次の場所で速く相互に知りあって活動し、人間関係を拡げている。白井博子さんの存在は遠く離れて住む女性たちをつないでいく役割を果たしてきたし、今も立派にかつてない新しい絆で人と人を結びつけている。白井博子さんのことは東洋大学の『二十一世紀の国際社会における日本——環境破壊・国際人教育・女性——』の中に「女性問題学習と人間関係の拡がり」として掲載されている。この度その頁を開いて、白井博子さんと再会しているようであった。

楚々として美しい博子さんを秋風の中に想う。最後に頂いた手紙を附加したい。

(川崎市・女性の学習情報をつなぐ会)

和枝さま

思いがけなくもお懐かしいお便り、どんなに嬉しく拝読いたしましたことか。何度も、何度も読み返えしました。

新川和江さんの「私を束ねないで」という詩、私もずいぶん前に出合つて、なんて素敵な詩だろうと心に残っていました。ですからお手紙の中にその詩を拝見した時、思わず涙が溢れました。あなたさまと同じ感性を持ち得たことをとても嬉しく思いました。励まされました。

いつの間にか入院も五か月目に入り病室でも四人部屋ですが、いちばん古い住人になり少し心がなえかけておりましたから……。

今日は主治医からこれからの治療方針の説明がございました。先月末で放射線照射三十回が終了し、検査の結果、よく効いてだいぶ病巣が壊死していることがわかりました。

それで来年年明け早々にも手術をして、いわばお掃除をすることになりました。もうひと頑張りもしようと思います。

二十一世紀がどんな世紀になるのか見たいですし、何よりも亡母が六十三歳まで生きましたから、私もせめて同じ年齢までは生きたいと思っております。

私は今まで、自分の命を粗末にして来たのかもしれない。勘違いをしていたのです。自分の命を大切にこそ、他の人の命をも大切なものとして考えることになるとうことになり、やっと思ひ至りました。あなたさまをはじめ、あごらの斎藤さま、澤田さん、学習仲間、大学・高校時代の友人たち、多くの方々の暖かいお励ましがどんなに心の支えになっていることか、本当に有難く感謝の気持ちでいっぱいでございます。

夫が毎日見舞に来てくれますことも有り難いことと思っております。夫は生活者としてすっかり自立しましたが、娘たちの方が会社人間になってしまつて……。

つい、つまらないことを書いてしまいましたが、どこかの学習会でひょっこりお会いできれば無上の喜びでございます。

今年の冬は寒さが厳しそうですね。

どうぞお風邪など召しませぬよう。私も来年は朗報がお届けできますよう、氣をつけます。

一九九六年十二月十一日

博子

「地の塩」のひと

斎藤 千代

白井さんが旅立たれてまもなく一年になる。一年になろうとするのに、私はなかなか立ち直れなかった。白井さんの存在がどんなに大きいものだったか、改めて知った一年だった。

白井さんに初めてお目にかかったのは、たしか一九八二年、新潟から「女と戦争」についての話のご依頼を受けた時だったと思う。その頃、私は人前で話すのが大の苦手で、お引き受けはしたもの、いざ壇上に立つと、目がくらくらした。その時一人、天使のような笑顔が見えた。そのやさしいお顔は、私の話の一つ一つにうなずき、励ましてくださった。それを支えによりやく話し終わったあとの懇談会で、私はその天使が、時々のお便りでお名前だけは知っていた（あごろ）の会員、白井博子さんだと知った。

白井さんはその後大阪に移られ、千葉に戻られたのが九二年だったろうか。ちょうど私が大きな手術をした後だった。病後の私を案じた大阪の澤田さんが「斎藤さんを助けて！」と白井さんに頼み込んで、思いもかけず（あごろ）の事務局を手伝って頂けることになった。

白井さんのお仕事は、ていねいすぎるほどていねいで、「誠実」をかたちにしたような仕上がりだった。国際婦人年連絡会の部会にも白井さんに出ていただいたが、五十二団体の方々から「本当に（あごろ）らしい方が来られた。よかった」と、口々に喜んでいただいた。

お金がないうえに超多忙な事務局で、白井さんは愚痴ひとつおっしゃらず、てきぱきと仕事をさばいてくださった。あの時、白井さんのサポートがなかったら、多分、私は回復していなかったらと思う。そのころ〈あごろ〉をアジュールとして、足繁く通って来られる方があった。胸につもる愚痴を白井さんは根気よく聞いておられたが、その方が〈あごろ〉で働きたい、と言い出されたとき、ご自分の報酬を半分にして、その方を支えられた。白井さんの報酬が半分になったことを、その方は、ついにご存じなかったと思う。白井さんは、いつも、そんな方だった。

北京の旅に白井さんが行ってくだったとき、一行は「ナイチンゲールさん」と白井さん呼び、そのあまりのサービス精神に心配なされた方も多かった。それから半年後のご発病は、過労の結果だったのではないかと、私は今も胸が痛む。

家事を受けもつ女性と違って、心おきなく仕事に打ちこめる男性は、職業上、多くの実績をあげる。階段をあがるように、地位も名譽も収入も手にし、その結果、大勲位はじめ、さまざまな勲章を手にする人も多い。しかし、社会が本当に必要なのは、名もなく、名譽もなく、ひたすらに地の塩として生き抜いたひとではないかと思う。白井さんが逝かれても、国民栄誉賞が贈られるわけではない。国家が人間に階級をつける今の勲章制度に反対する意味もこめて、せめて、白井さんの名を冠した「白井博子・地の塩賞」を、という声が自然にあがったのは、同じ思いの人びとが多かったからだろう。

白井さんは、お墓をおつくりにならなかったが、東山の僧堂の一寓に祀られ、「博さん」「孝さん」と呼びあっておられた最愛のおつれあいが、毎月ご命日にお経とお花を手向けておられる。「遺品を整理していたら、たくさんさんの随想断片が出て来ました。それを本にすることを、私の生涯の仕事にします」と、

白井孝欣氏は語られた。そのご本が出来たとき、何度も何度もひもとしては、またあなたにお会いしよう。同じ病にかかりながら、ひと回り以上も年上の私が生きのびている。そのことを苦しく思っていたが、私も、「これからを乙羽さんと共に生きます」という新藤兼人監督のように、「博さん」の魂を胸の奥深く収めて、彼女と共に生きよう、と、やっとこの頃、思えるようになった。

(あこら新宿事務局)

イタリア・鳥越・そして新宿御苑の空に今も

真木 泉

「こんにちは！」

こぼれるような笑みの白井さんとの出会いは、あこら事務局の一員となられたその日、一九九二年のことだった。

白井さんは〈あこら〉のボランティア活動を担い、〈BOC〉の実務に明け暮れる私とは協同の仕事の機会はありませんでしたが、読書という共通の趣味がその間を埋めてくれた。ご自身が中国で生まれたこともあり、当時話題となった『ワイルド・スワン』に最も早く注目し、「ぜひ」と言って貸してくれたのも彼女である。また〈BOC〉の仕事に関連する、養老孟司氏や中村桂子さんの「ヒト、人体」に関する本を素早く手渡してくれたのも彼女だった。沖縄関係の本がないかと問われ、手持ちのものを貸したこともあるが、「ああ、こういうことも勉強しているのだ」と、その読書量のみならずジャンルの広さに

感心させられた。

そのようなかでひとつのことがどうしても彼女の記憶と重なって浮かんてくる。

当時、「久々に、辻井喬が長編を発表する」というニュースが入った。私は辻井喬の小説が好きで、どんな短編でも読んでいたが、今までそういう話はあまり身近な人とはできなかった。辻井喬とは、ご存じ堤清二氏のペンネームである。彼の学生運動の挫折とその後の企業人としての生き方が、どうも周囲には受け入れられにくいのか。ただ、私は彼の文体はもとより、その挫折と企業人として生きる自分の内面を見つめる筆致にいつも感嘆していた。何かの折その話が出て、「私もとても好きなのです」という彼女の言葉に会話は一挙に弾みがついた。どちらが買うかという話にまで行き着いた。

その本は、『虹の岬』——昭和の歌人、川田順を描いたものである。歌人でありまた、住友で第二線の実業家でもあった点が、著者と重なるが、何よりもこの小説は実話に近い、弟子であった「祥子」との純愛小説である。戦中、戦後の日本の家族制度と、格式の高い家の重圧の中で、「愛と文学のために」川田との「生」を選んだ女性。「祥子」は夫とも子どもとも別れ、ひたむきではあるが生き方の芯を貫いた人だ。家や社会やさまざまな関係に縛られ、それを受容しながらも、しかし芯のところでは決して何ものにも屈せず己を貫く、いわば日本の女性の強さのようなものをこの主人公に感じ、なぜか白井さんにも共通のものを感じ続けたのである。私は白井さんより少し年齢が若く、自己の主張は必ず述べる世代に属しているせいかもしれないが、ひたむきに、しかし、心の芯をおす意志深きひと、という印象がそうさせたのかと思う。また、「祥子」の幼女のようなはじらいの描写にも似たものを感じたのかもしれない。「とてもよかったですよ」——受け取ったその本は装丁も美しかった。一気に読み、読後感を共に語った日が懐かしい。

「毎日が博物館の中にいるようです」

イタリア、ローマから白井さんの絵はがきが届いた。九四年のこと、まさに名文である。この頃白井さんは、おつれあいの定年後、二人で世界の各地を旅していた。そのフリーズに惹かれて、私は翌年、イタリアへ旅することになってしまった。そして、「ウツフィツィ美術館」の宗教画の天使の姿に白井さんの顔を見つけたのである。海外で、多くの宗教画に接すると、必ず知った顔を見つける経験は多くの方がお持ちだと思うが、それは人類と宗教の深みの問題なのか遺伝子DNAのなせる業なのかはわからない。その後、斎藤千代さんから白井さんの病状がおもわしくないとの話があった。病床にあり厳しい闘病の日々を送っているのではないか、心が締めつけられる思いがした。私は自分のつれあいを亡くした最も辛いときに、楽しかったことを思い出して心の回復を図った経験があったので、あのイタリアのことをすぐに思った。白井さんに、「どうか、楽しかったこと、楽しい旅行のことを思い出して、がんばって」と葉書を書いた。そして、イタリアで撮った、石畳と、かさ松の緑に霞む雨のアップピア街道の写真を、習い始めたパソコンで「フォト加工して送ります」と書いた。ただ一枚の写真を送るのでなく、白井さんが病いと闘っているのなら、私も創るということをとおし、共にありたかったのだと思います。そして、その約束は果たせぬまま終わってしまった。

「夏には鳥越祭りに行くですよ」

おつれあいが下町の出身、鳥越に実家があるという。私も下町の育ちで、夏の知らせは鳥越祭りや三社祭り。そしてこの六月、通勤途中の地下鉄の駅で、「今日は鳥越祭り」の案内を見た。その途端白井さんのことが思い出されて涙が浮かんた。

涙を心にしまい込み、事務所で机に向かっていたら、おつれあいの孝欣さんが〈BOC・あごろ〉に現れた。なんたる偶然。ああ、この方は博子さんの足跡を追っておられるのだと、そのとき深く確信した。イタリアの空に、鳥越の空に、そして新宿御苑の空に、今も白井さんはいるのだと私は思う。(BOC)

ホツとする温もり——白井さんは「隅の親石」

芦澤 礼子

「あらー、芦澤さん、お久しぶり！ 会えて良かったわ……」

九五年八月末、北京空港で〈あごろ北京会議ツアーご一行様〉を待ち受けていた私の目に、飛び込んできた笑顔。中国へ行く前に〈あごろ〉新宿事務所でよくご一緒した、白井博子さんだった。

私は九四年から日本語教師として中国に行っていて、〈あごろ〉で北京会議ツアーに参加される方のお顔をほとんど知らなかったので、現地ですぐに合流できるかどうか不安だった。ただ、白井さんが参加されるということを聞いていたので、その点は安心していいかな、と思っていた。予想どおり、久しぶりにお会いする白井さんは、変わらぬ温かさで参加者の要の役割を果たしているようだった。

ホツとする温もり、安らぎ。女性運動や市民運動に参加していても、案外そんな雰囲気を持つ方は少ないと感じる。バリバリ活動型、カミソリ論客型の方は多いし、必要だけど、そればかりでは疲れる。

白井さんは温もりの人だった。「この人なら安心できる」と誰にでも感じさせるような、希有な方だった。

言葉は少なかったけど、重みがあった。白井さんが船橋市にお住まいの頃、私も船橋市に住んでいたの
で、活動で一緒にした際に帰りまで一緒にできるのがとても嬉しかったことを、よく覚えてる。

今回、白井さんの追悼特集を編集するに当たって、「そんな派手なこと、白井さんのご性格だったら喜
ばれないんじゃないの」という意見も耳にした。また、白井さんは有名人でもないし、直接ご存じない
読者の方には、ピンと来ないんじゃないかとも思った。

しかし、こうしてまとまったものを読んでもみると、何やら言いようのない感銘を感じるのだ。「やつぱ
り特集をつくって良かったんじゃないか」と今では思える。派手な人生じゃない。波瀾万丈でもない。
大学教授でもテレビキャスターでも、作家でも芸術家でも政治家でもない方だけど、聖書に出てくる「隅
の親石」のように、地道な活動は女性運動という建物を支えた。一見平凡な人生でも、一本シンの通っ
た生き方と温かい人柄で、九州、新潟、大阪、千葉、東京と、各地でこんなたくさんの人に感銘を与
えられたのだと思うと、なんだか勇気が湧いてくる。

白井さん、あなたの人生は不本意でしたか？ それとも、短かったけど充実した人生を送られたと述
懐していらっしゃいますか……きっと、微笑んで答えられないと思うけど。（あこら新宿事務局）

モナリザの 笑顔に似たる 白井さん

荻原有希（あこら新宿・元事務局）

〔弔辞〕

いま旅立つあなたに

斎藤 千代
あごら事務局

白井さん、博子さん、博さん

祭壇の下で、静かに横たわっていらつしやる博さん。聞こえますね、私の声が。

今日はたくさんの方が、あなたとひと言でもお話ししたくてつめかけておられます。その中で、声を出してお話できるのは二人。その一人となつて、大勢の方に申しわけない気持ちでいっぱいですが、多分、皆さんも同じ気持ちでいらつしやることと、皆さんに代わってお話しますね。

ゆうべあなたのお姿を見て、私はひと言も声が出なかつた。涙だけがあふれ出て、ホテルに着いてからも、ただただ号泣していました。弔辞を書かなくては、と思うのに、一字も書けないのです。今までずいぶんたくさんのおいしい人と別れましたのに、こんなに涙があふれ出たことはありません。ホテルには真新しいティッシュの大きな箱が二つもありました。それを使って、使つて、使い尽くしても……。人間のからだのなかに、こんなにもたくさんのお涙があつたのかと、あきれはてながら、とうとう朝になり、この時間になりました。あなたにお渡しする手紙は一字もないのです。ごめんなさい。でも、やさしいあなたは、きっといつものようにほえんで、ゆるしてくださいますよね。

博子さん、博さん。ここにいるみんながそうお思いのように、私はあなたの笑顔が大好きでした。疲れたとき、傷ついたとき、あなたの笑顔にどんなに救われたことでしょう。お心がそのままお顔になったような、きれいな、やさしいやさしい笑顔。

神様も仏様も、あの笑顔に惹かれて、あなたをさらっていこうとなさったのですね。

あなたはリレーの選手でいらしたとか。走るのも、お仕事も、行動も、何でも早かった。でも、天国行きのテープまで、先頭きってお切りになるなんて。

ようやく五十、これからが人生の花という時に、どうしてそんなにお急ぎになるの。

でも、考えてみると、あなたは人が百まで生きてもできないほどのたくさんのお仕事をなさった。ご専門のお仕事も、ボランティアとしての「へあごら」の活動も。

そして、あなたに接した人は、みんなあなたが大好きになった。そのことを、あなたも多分お気づきだったと思います。

お姿と同じように、お心も、ほんとうに清らかな方。お声も、きれいでしたね。そして音程が確かで、あなたと一緒に歌うと、まるでピアノの伴奏がついてるみたいで、歌うことがほんとに楽しかった。

どんな仕事も、あなたはいやな顔ひとつなさらず、いつも一心不乱でしたね。誠実ということばは、あなたのためにつくられたのではないかと、私はただただ感心するばかりでした。

おつれあいの転勤で、あなたの職業生活はたびたび中断され、さぞ残念だった面もおありだったでしょうに、あなたは、行く先々で、仕事も友人も新しくつくり、ご家庭を大切になさったのと同じくらい仕事も市民運動も大切になさった。いつもいつも、人の三倍も四倍も生きていらしたあなたは、ほんとうに「地の塩」の方でした。そして一粒の麦として、いま長い眠りにつこうとしていらつしやる。ここに

いる私たちみんなの心に、からだに、あなたの妻は生き続けると信じます。

深い悲しみの中で、ただ一つ救われるのは、あなたがあれほど愛し続けられた「孝さん」が、ご病気がわかったとき、ご自分のお仕事をやめ、主夫となつてすべてを尽くされたことです。政府の出す「大勲位」とは比較にならない素晴らしい価値のある勲章を胸に、あなたはいま旅立たれる。

博さん、博子さん、いつてらっしゃい。あなたの懸命の祈りと実行で、日本の女の状況は、確かに良くなりました。

ありがとう、ありがとう、ありがとう。

あなたのまかれた一粒の妻が、地球をみどりに染めていく姿を、空の上から見まもつていてくださいね。お元気でね。

クラスメイトを代表して

横沢 明美

九州大学薬学部十四回卒業生代表

博子さん、一昨日九重山の家にて、四回目の薬学部十四回生の同窓会を楽しくにぎやかに過ごしました。そこで、あなたがおかげが悪く、この会にこれないと聞いていましたので、絵ハガキにみんなで作った手紙をして、送ろうとしていたところにあなたの訃報が届きました。

一同、一瞬、全く言葉を失いました。あなたも、今回の同窓会にきたかったんだよねえ。残念です。

あなたと私は九州大学の女子寮で一緒に二年間を過ごしました。その間のんびり屋の私のためにいろいろと気配りをしてくださり、私の落ち度をカバーしてくださいました。

また、薬学部の学生実験では、旧姓、浜高家、平川組としてコンビを組み、お互い助け合ってがんばりました。あなたはマンドリンクラブ、私はテニス部で二人とも忙しかったので、実験をいかに要領よく、早くすませるか苦心しましたね。

あなたは日本の美人で、ミス薬学とよばれ、男子学生のアコガれの的でした。また、美しい歌声の持ち主で、寮から大学まで「学生時代」や「さくら貝の歌」を歌いながら歩いたものです。今でも透きとおるようなあなたの歌声が耳によみがえってきます。

大学卒業後、三十二年。はじめて大事なクラスメイトを失った悲しみは言葉に尽くせないものがあります。まして、私にとって青春時代の大事な時期に寝食をともにした親友を失うことは、自分が立っている足元が崩れ去っていく気がします。

これからは、われら十四回生の愉快な団結ぶりを天の上から、笑って見守ってください。博子さん、やすらかに眠りください。

平成九年十月十三日

「白井博子地の塩賞」にご協力を

「あこらのナイチンゲール」の名で敬愛されていた白井さんが亡くなられて、まもなく一年になります。「地の塩」のような、地味な、でも社会に一番必要な仕事を黙々と続けておられた白井さんですが、教授とか局長といった職業に就かれたことはなく、中曽根さんのように大勲位が贈られることはありません。でも、こんな方こそ長くそのお名前をとどめたいと思います、「白井博子地の塩賞」を呼びかけたいと思います。

すでにさつそく基金をご送金下さった方もおられますが、さらに広範囲の方にお知らせして、来年のご命日には授賞式を……と考えています。賛同人にお名前を連ねてもよい方、基金（二〇一千元）をご出資下さる方は、至急ご連絡下さい。お待ちしております。

一九九八年秋「白井博子地の塩賞」準備委員会

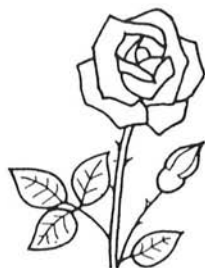
倉元 正子
小島サカエ
斎藤 千代
澤田 和子
高橋ますみ
福田 光子



（逝去半年前の白井さん（左側）。
ご退院後すぐ、辻みゆきさんの出版記念会
の受付で活躍。「あこら」も売ってくださった。
「働ける限り奉仕」のお姿。）



1993年7月 戦争への道を許さない女たちのつどい
左端が白井さん（新潟市女性センターにて）



白井博子さん 想い出のアルバム



1995年9月北京会議で
（左前方）



1983年2月 大阪市立婦人会館講座終了式。前列中央が白井さん

〔白井博子さん遺稿〕

母の遺してくれたもの

昭和四十三（一九六八）年三月三十一日未明、母・浜高^{はまたけよしこ}家良子は癌で亡くなりました。享年六十三歳。丁度七カ月の入院でございました。

三十一日の明け方四時ころ、姉から「ハハキトク」の電報を受取りました。東京で勤めておりました私は、このときほど九州を遠いと思ったことはありませんでした。

病院につきましたのは午後一時過ぎでしたが、病室はすでにガランとしておりました。家について、兄弟たちの顔を見たとき、はじめて涙が溢れ出てきました。

母の死顔は、閉棺のときはじめて見ました。やせ細って、腹部ばかりが異常にふくれて、元氣だったころのふくやかな母の面影は、見るかげもありませんでした。それに、三角の白い布が頭に巻かれてあったのも、私には異様に映りました。

母は、これから少しは薬ができるというときになって亡くなりました。母はどんなにか口惜しい思いで、また、未だ嫁がぬ娘三人を残して、うしろ髪をひかれる思いで亡くなっていったことか胸が痛みます。

幸薄い一生だったと思います。今年は丁度母の十三回忌。母のことを書くことになりましたのも、何かの因縁かもしれません。

生いたち

母は明治三十八年（一九〇五）七月二十日、今村孝内・キソの長女として、大分県別府市亀川で生まれました。父・孝内は杵築きづきの出身で医者でした。母・キソは五歳のときに結核で亡くなり、その後、継母がまいりましたが、この継母も七歳のころにやはり結核で亡くなり、三人目の継母を迎えております。弟妹もいたようですが、みんな同じ結核で夭逝しており、母は一人娘のようにして育てられたと聞いております。私が結婚後、亡き父母の墓参にまいりましたとき、亀川の海をよく見える小高い丘の上に、その弟妹たちの小さな丸い石を置いただけのお墓が、ちよこんと三つ並んでいたことが思い出されます。母がとりわけ子煩悩であったのは、自分の幼いころの体験からきていたのだなあと、胸が熱くなったことも思い出されます。

学校は、大分の岩田高等女学校へ通ったそうです。父親が手元から離れたがらず、結局、地元の女学校へ行かされました。当時、同じ組から一、二名しか進学できなかったことを思えば、母は幸せだったといわねばなりません。後年、夫に先立たれた母は「あのとき女医専に行っておけばよかった。女も手に職がなければ駄目だ」と申しておりました。私が薬学を専攻いたしましたのも、まさかのときに役立つようにという母の願いからでございました。

結婚して旧満州へ

昭和二年（一九二七）、母は二十二歳で父・浜高家三次と結婚いたしました。当時としては遅い結婚でございました。父も医者でしたが「父さんがお医者さんだったから結婚したのよ」と申しております。

父は、現在の大分県宇佐市下高家の素封家の三男として、明治三十三年十月六日に生まれました。父親も兄もともに医者でした。どういう考えから渡満したのか、今は知るよしありませんが、父母は結婚してすぐに旧満州の撫順に渡り、満鉄病院に勤務いたしました。

そして、昭和三年から昭和十一年の間に、二男三女をもうけております。兄妹たちはみな営口生まれでございます。私は四女として、昭和十七（一九四二）年に哈爾濱で生まれました。

当時は、軍国主義の名のもと、子どもは国の宝として「産めよ殖やせよ」の時代で、子沢山は珍しいことではなかったようですが、お手伝いさんがいたとはいえ、母の苦勞は大変だったようです。

よく母は「満州にいたときには、どこにも連れて行ってもらえなかった」とか「何度、家を飛び出したいと思ったかしないけれど、あなたたちがいたからじつと我慢していたのよ」などと申しております。また「お父さんは封建的だったから」とも申しております。

満鉄華やかなりしところで、毎晩のように宴会、宴会で、父の帰宅も遅かったようですが、一度も家を空けたことはなかったと申しております。幼かった私は言葉通りに聞いておりましたが、今になってその本当の意味が分ったように思います。父はきつと心の内では母を大切に想って、母一人を守っていたでしょう。

「これ、お父さんが東京の三越で買ってきて下さったお召よ」と、母が嬉しそうに話していたの思い出します。戦前に買った古いお召です。私はその着物を今でもよく覚えておりますが——エンジ色よ

りもう少し紫がかった地色に、白い点線描きの梅の花を散らしてあるので、母にとってもよく似合う上品な着物でございました。私の学校の参観日などにも、よく着てまいりました。何度も何度も洗い張りし、縫い直して大切に着ておりました。

父は、撫順、営口、吉林と転動した後で、昭和十五年、学位をとるために九州帝国大学の解剖学教室に二年間留学することになり、一家をあげて博多の伯母（父の実姉、存命）の家の近くに住みました。母にとりまして、このころが一番幸せな時代ではなかったかと思っています。

後年、私が九大の薬学部に入學したとき、身体検査で眼科へまいりますと「浜高家先生は今、門司におられるのですか」と聞かれ、驚いたり、二十年以上も前の父を覚えていて下さった方がおられたのかと、嬉しく思ったことでした。後に触れますが、このときすでに、父はこの世の人ではなかったのでございます。

昭和十七年五月、父は学位を取って再び哈爾濱にもどったのですが、そのとき、息子二人は学校のことを考えて、博多の伯母の家にあずけてまいりました。しかし、長男の方は体が弱かったので、すぐに呼び寄せたようです。

十八年には、父は哈爾濱からさらに北の齊々哈爾の満鉄病院へ単身赴任し、家族たちは終戦直前の二十年七月に齊々哈爾に引越しました。そのころ、長男は学徒動員されており不在でした。内地におりました次男からは、予科練に入りたいという手紙がまいりましたが、両親は許さなかったそうです。

戦後の混乱の中で

終戦は齊々哈爾の満鉄住宅で迎えましたが、ただちに八路军から社宅明渡しを命ぜられ、一時期、知人宅に身を寄せておりました。

父は日本人会診療所の所長として、開拓団のかたがたなどを無料で診察しておりました。また、家にはいつも数人の身寄りのない日本人や、いわゆる満州浪人のような方たちが寝泊りしており、母の持っていた着物などは、ほとんどこのときに食料に化けてしまいました。

私は終戦のとき三歳でしたが、今でもよく覚えておりますのは、薄暗い広場に、きつと黄昏時だったのでしょう。日本人が沢山集まってお金になりそうな品物を、着物から箆簞にいたるまで、あるだけ並べて売っていた情景でございます。

昭和二十一（一九四六）年、父は中国・八路军（紅軍）の陸軍病院に移られました。この年、日本人の引揚げが始まったのですが、父には待ったがかかったのです。看護婦さんや若いお医者さんたちも残ることになりました。

父は、戦争に責任を感じていたようで、自分から進んで残ったふしがあります。母が「お父さんは要領が悪いから」と、のちのちまでも申しておりました。

私どもは戦争の被害者ではありましたが、加害者でもあったことを思わずにはいられません。満州という言葉を使うことさえ、憚られるような気持ちでございます。

その意味で、父が戦後の中国で少しでもお役に立てたことは、せめてもの罪ほろぼしであったと思っております。そのことで、かけがえのない父を失うことになりましたが……。

残された日本人は一カ所に集められて、一つの大きな家族寮（中国語では生活必需寮）を与えられま

した。しかし、まもなく紅軍と国民党軍との間に内戦が始まり、私どもは中・ソ国境の近く、興安嶺の嫩江^{のんじやん}まで、春まだ浅い大平原のなかを馬車にゆられて疎開いたしました。

今日、テレビなどで報道されておりますカンボジア難民のような悲惨なものではなく、むしろのんびりとした旅行のような感じでございました。

このころから私は病気がちで、熱が出ますと母はすぐに、熱い湿布をホーホーいいながら胸に巻いてくれました。父はうどんやすいとん（おだんごじる）を作ってくれました。今でも寝込んだりいたしますと、父母の真剣な顔とともに、あのころのことが懐かしく思い出されます。

翌二十二年の春、また齊々哈爾にもどりました。このときは北斗寮というアパートに、日本人医師の家族ばかり十軒程で住んでおりました。二階建てでしたが、右側の屋根は爆撃でなくなっており、壁にも大きな弾の痕があるようなすさまじい家でした。

三時になると、母はよくこわれた釜を天火がわりにしてパンを焼いてくれたり、昔の母親がみんなそうだったように、セーターから下着にいたるまで手作りしておりました。また、母は中国語が話せませんでした、買物など身振り手振りよろしく、実に上手にするのでした。

ここで一年間過ごし、翌二十三年の春には、またまた、哈爾濱に移りました。哈爾濱医大ができ、父がその五感科（眼・耳・鼻・歯・皮）の教官として招かれたのです。医大の一期生を教えたことになりました。

このたび、新潟市が哈爾濱市と姉妹都市になりましたが、使節団の一行に哈爾濱医大のかたがたが加わっておられると知り、懐かしくさえました。

父の発病

話がそれてしまいましたが、昭和二十三年の夏には、今度は呼蘭こらんという町に五感科の病院ができ、父はその眼科医として勤務するよう命ぜられ引越しました。

しかし、父はこのような転勤につぐ転勤と、さらに毎日何百人という患者さんの診療とで、過労から結核で倒れ寝込んでしまいました。それで、二十四年の早春、療養のため一面坡いっぺんぽという町へ移りました。夜、真白な雪が積ったなかに到着したことが印象に残っております。

一面坡は四方を山々に囲まれ、澄んだ川の流れている四季折々の自然が美しい、山紫水明という言葉がぴったりの町でした。

父は掛布団が重いと申して、天井からそれを吊っております。母の方は、体にいいからと毎日のようにレバーのそぼろを父に食べさせて、父を辟易させておりました。

ほどなく母の看病の甲斐あって、父は小康状態をとりもどしましたので、同じ一面坡ですが別の家へまた引越しました。家の前が一面のレンゲ草で、少し先にはロシア人の家があり、牛乳や杏の実をよくいただきに行ったものです。

「いただく」と申せば、水谷さんとおっしゃる日本の青年が、よくキジやノロ（この動物はとてものんびりしているのでこの名があるそうです）の肉や毛皮を持ってきて下さいました。

母と元気だった中の姉二人は、大きなリュックをしょって出掛けては、買出しだったのでしようか、それとも配給だったのでしようか、食料などで一杯にして帰ってまいりました。

そして、ときには母子で山へ登つて翁草おきなぐさやスズランを摘んだり、川でメダカをすくつて遊んだりしました。父が療養中であつたとはいえ、病氣もほとんど回復し、このころの生活がいちばん屈託がなく平和な毎日でございました。

しかし、好事魔多しです。

長兄が看護士として病院で働いていたのですが、ここで腸チフスにかかり、母の必死の看病の甲斐もなく、兄はあつけなくこの世を去ってしまいました。昭和二十四年九月二十九日、兄・二十一歳のことでございました。

亡くなる直前、兄が西瓜を食べたがり、母は西瓜汁を飲ませてあげたそうですが、そのことが命取りになつたと、のちのちまで自分を責めておりました。

兄の遺体は、母たちと遊んだ一面坡のあのきれいな川の河原で荼毘に付されました。中国は土葬の国ですが、母が頼み込んで火葬にしたのです。母や姉たちが石油をかけて焼いたのですが、なかなか焼けなくて難儀したそうでございます。

父の死

母は兄の死の直後、献身的な看病の疲れと嘆きから、心臓発作を起こして倒れ、生死の間をさまよいました。今度は父がつききりの看病をいたしまして、母はやつとのおもいで一命をとりとめました。

しかし、ここでまた、治りかけておりました父の病氣が再発してしまいました。もはやこの田舎では治療もおぼつかないということで、昭和二十五年の春、齊々哈爾チチハルの陸軍病院に戻つてまいりまして、父

母二人して療養しておりました。

まもなく母は全快いたしました。父はそのまま悪化の一途をたどりました。母は毎日病室に通いました。帰ってまいりますと全部着替えて、煮沸消毒しておりました。

「母さんが帰るといって、父さんが『もう帰るのか、もう少しいてくれよ』って。あんなに気の強かった父さんがすっかり優しくなってしまうて」と母は涙ぐんでおりました。

父が亡くなる二、三日前に、母は私も四人の娘を連れて父を見舞いました。母には予感があったのでしよう。父の顔は土気色になり、目はおちくぼんでお猿さんのようになっておりました。

昭和二十六（一九五二）年七月二十日、奇しくも母の誕生日に父は永眠いたしました。五十二歳でございました。母は「お父さんには済まないけど、お兄ちゃん（長男）が亡くなったときの方が悲しかった」と申しておりました。

父の遺体は陸軍病院の墓地に埋葬されましたが、翌々年、私も日本に帰ることになりましたとき、母は病院に掛け合って父の墓を掘り返し、遺体を焼いていただき、お骨を日本に持って帰りました。

母には、こうと思っただけでやりとげる強さと優しさがありました。母の口ぐせは「人間の幸せは地位や名誉やお金ではない。優しさがいちばん大切だ」ということでございました。

新中国での生活

父の死後、私も引揚げてまいりますまでの二年間、質素ではありましたが、なに不自由な生活を病院から保障されておりました。綿布や高梁（こうるやん）（主食）の配給もありました。

しかし、開拓団のかたがたや、夫や父親をシベリアなどに抑留されたかたたちの生活は悲惨なもので、栄養失調のために失明したり、死んでいく子どもたちもありました。その人たちが住んでおられた暗い寮、名を青雲寮と申しましたが、およそ名前とはかけはなれた暗い部屋を、今でもよく覚えております。日本人小学校がこの寮と棟続きにあったのです。

病院の食堂の朝食はいつも、フアーゴ（ふんわりした細長い揚げパン）と豆乳（大豆をしぼって作る）とちよつとした野菜いためとかでしたが、母はフアーゴをこつそりカバンに忍ばせて、私たちが学校に行くときに、学校のお友だちにと持たせてくれました。

当時、齊々哈爾には在留邦人が一千名近くおり、日本人僑会きやうかいを組織しておりました。そして、親睦をはかるための運動会や演芸会などを行い、新聞も発行しておりました。

また、新中国では六月一日が国際児童デーに定められており、私どもの日本人小学校も、朝早くから旗をおし立てて行進に参加し、器楽合奏や合唱や踊りなどを披露いたしました。

また、ピオニールといって、いわゆる模範生に赤い三角のネッカチーフが贈られ、胸には星のワッペンをつけ誇りにしていたものです。

また、いつのころだったでしょうか。首から「反革命分子」とか「反動分子」とか書いた板をぶらさげた男たちが、馬車の上に立たされて市中を引回されていたこともありました。

朝鮮動乱のときは、あちこちに「日本鬼子」（これは抗日戦線のさなかに書かれたものです）という落書きにまじって「抗美援朝防我（本邦）国」とペンキで書かれてあり、日本人青年のなかにも義勇軍に志願したかたがおられたようです。現在の国際情勢を考え合わせるとき、感慨深いものがございます。

日本へ

昭和二十八（一九五三）年三月、日本に帰れることになり齊々哈爾をあとにしました。母と姉たちとの間で、中国に残るかどうか話し合われたようでしたが、母の故国への想いは断ちがたく、結局、日本に帰ることにしたのでした。列車のなかでスターリンの死が報道されていたのを、印象深く記憶しております。

途中なんという村だったか忘れてしまいましたが、中国人の民家に三カ月ほど滞在しておりました。貴金屬類はすべて没収され、母が大切にしておりました金縁の眼鏡なども取上げられてしまいました。

その後、天津の近くの秦皇島しんのうとうに一カ月ほど滞在しました。私はこのときはじめて海を見ました。秦皇島はとても美しい港で、丁度七月初ころでしたが、ニセアカシアの白い花が満開で、甘い香りをあたりに漂わせていました。さながら新潟の初夏のころのように……。

私たちは、毎日のように海辺へ遊びに行きました。待ちに待った帰国船・高砂丸（約一万トン?）が停泊したときには、本当に感激いたしました。夜、文字通り満艦飾に燈をつけた船は、ロマンティックで感動的でさえありました。浜育ちの母には、ひとしおの感慨だったようでございます。

船中の食事に、ウスターソースが出たことがございましたが、私の初めていただくものでした。中国には、醬油しかなかったのです。母が「恥ずかしいから、ソースを知らないなんていわないでね」と、申していたことも思い出されます。

船は、舞鶴に着きました。小雨まじりのあいにくの空模様でしたが、緑の美しい、まるで箱庭のような港でございました。

舞鶴へは、次兄が迎えに来ておりました。私の初めて見る兄でした。当時、兄は国鉄に勤めながら慶応義塾大学の通信教育を受けておりました。戦後の混乱期を兄もまた、日本で伯母の家から一人離れて生き抜いてきたのです。

父の名を穢してはいけないと思つて頑張つたと申しておりました。しかし、父が亡くなったことを知つたショックなどで、かなり精神的に荒れておりました。通信教育も、毎日の生活に追われて、スクーリングに行くのが延び延びになっていたようです。

私が高校に入学したころによく、兄も国鉄を辞め、退職金を学資にしてスクーリングのため東京いたしました。卒業後一年ほど、私どもの従兄が経営していた会社で働いていたようですが、その後帰省いたしました。母の奔走で母かたの親戚を頼つて就職、結婚し、福岡に落着きました。

私どもが引揚げてまいりましたときに、兄が母に「子どもは手放すものではない」としみじみ申したそうです。しかし、兄たちにとつてどちらが幸せだったのでしょうか。手元に呼び寄せた長兄は、再び日本の土を踏むことができなかったのですから。父がよく「人間万事塞翁が馬」と申していたそうですが、全くその通りだと思ひます。

しかし、とにかく母は兄を手元に置いて育てなかつたことを不憫に思い、責任も感じていたようで、兄には本当に何くれとなく氣を使つておりました。

話が前後いたしました、とにかく兄の計らいで九州は門司の引揚者住宅に落着きました。六畳、三畳の和室、玄関、トイレ、それにお勝手口にはんのちよつとした台所がついた二軒続きの平屋で、水道

は共同でした。お風呂も近くの国鉄官舎の共同風呂をただかせてもらいました。

生活は、母の内職と兄弟たちのお給料でまかなっておりました。母にはこれといって手に職があるわけではありませんでしたが、少し和裁をいたしましたので、小料理屋や旅館や洗張り屋さんなどから、和服の仕立の注文を取って歩きました。私もよくついてまわりました。

家では、若い娘さんに和裁を教えたりもしておりました。また、洗張りに出す前の和服をほどこいたり、封筒張りやマツチ箱張りの内職なども家族みんなで行っていました。

しかし、母はいつも堂々と「同じ一生だもの、明るく生きなければ損々」と申して、朗らかにしておりました。そんな母の自慢は、どこからもだれからも一銭の借金もしていないということでした。

母の就職

借金こそしていないとは申せ、内職はしよせん内職でしかなく、したがって実入りのいいはずはありません。

昭和三十三年ごろ、母の従兄のついでで戸畑市（現在の北九州市戸畑区）の小学校で、給食婦として働くことになりました。はじめは臨時雇いのようでしたが、まもなく戸畑市の正職員になりました。

正職員と申せば、母は私が学校や会社に提出する身上書に、母の職業として「給食婦」と書くのをひどくきらい、「地方公務員」と書きなさいと申しておりました。職業に貴賤はないとはいえ、母にはつらいことだったようです。私もまた、なんとなくはつきりいえなくて、母の職業について口を濁しておりました。

しかし今、母が給食婦として頑張ってきたことを誇りに思い、卑下する気持ちがなくなつたことを、われながら成長したものと自画自賛しております。

勤めはじめて一二年たつてからでしたでしょうか。母の手が非常に荒れはじめ、水を使う仕事なので水虫ではないかしらと心配して、ずいぶん長い間皮膚科に通い、塗り薬をいただいたり、太陽燈を当てたりしてりましたが、一向に治らず、見つかったら非衛生だ——ということで、辞めさせられるのではないかと母は心配しておりました。

今にして思えば、当時(昭和三十四、五年ころ)食器、野菜洗い用の合成洗剤が急速に普及しはじめ、野菜についた回虫も落ちるなどといわれたものでした。給食の現場でも当然取入れられ、母の手はその合成洗剤に冒されたのだと思います。当時はまったく原因が分りませんでした。

しかし今は、母の癌の誘因の一つにもなつたのではないかと確信して疑いません。

私の進学と就職

母は、家では私ども娘に、父親がいないからとひとから後ろ指を差されないようにと、黙や言葉遣いを厳しくしておりました。また「女の子は優しさがいちばん」とも申しておりました。

私には「博ちゃんがいちばんいいね。何の苦労もなくて……」と申しておりました。それは私を非難してではなく、末っ子の私をとりわけ可愛がつくれた母の愛情からでした。

しかし、私は内心ではときどき、そんな母をうとましくさえ思っておりました。幼いころからいい子、いい子で育ってきた私にも、遅まきながら自我が芽生えてきたということでもあったのでしょうか。

大学に進学することについては、母や姉たちにばかり苦勞をかけてと、兄はあまり賛成ではありませんでした。逆に母や姉たちはできることなら是非行くようにと勧めてくれました。

当時は、高卒の就職口としては、なんと申しまでも金融機関がいいといわれておりましたが、片親の子女は採用しないということで、当然のことながら私もその例外ではありませんでした。ですから、自分に実力をつけ、自分の道は自分で切り開かなければなりませんでした。

父の後を継いで医者に——というのが家族みんなの夢でしたが、経済的理由と、医者の仕事から、平穩な結婚生活を送り難いのではという母の考えから、薬学を専攻いたしました。

親からの仕送りも受けず、奨学金とアルバイトだけで四年間を通しました。確か学費が年間九千円の時代でした。

母は「大学を出て、これ見よがしのひとと結婚しなさい」と申ししておりました。「本当の幸せは、地位や名声やお金ではない」といいながら、勝ち気で気位の高かった母には、親戚たちへの断ちがたい対抗意識があつたように思います。

「大学を出たら、母さまにも樂をさせてあげるからね」と約束しておきながら、その約束を反古にして、私は就職のため上京いたしました。母は淋しそうでしたが、許してくれました。

私は教授の推薦で、東京丸の内に本社のある石油化学会社に入社し、研究所に配属されました。就職の条件は、当時世田谷に住んでおりました私の従兄の家から通勤することでしたが（要するに女子社員は親元から通勤することが条件だったのです）、母は、四月にいっしょに上京してまいりましたときに、従兄の家からだとか何かと氣苦労だろうからと、私が出勤しているあいだに近くに貸間を捜してくれてあり、私をびっくりさせたりしました。

母との旅行

母は小学校が休みになりますと、待ちかねたように上京してまいりました。そして、いっしょにあらこちらと旅行いたしました。と申しても、たったの三夏で母は亡くなってしまったのですが……。

母の寿命を縮めた責任の大半は私にあるような気がして、キリツと胸が痛みます。姉たちが夏休みには健康診断を受けるようにと、いつも勧めていたそうですが、それを振り切って私のところへきていたからです。

旅行好きな母は「口と足さえあればどこにでも行ける」と申しておりました。

一番印象深い旅行は、何と申ししましても最後となった箱根・伊豆旅行でございます。旅行案内書を頼りの二泊三日の旅でございました。しかし、あとから想い起せば、母はかなりつらそうでした。大涌谷では硫黄のにおいに顔を蒼くしておりました。

ほんとうに母には、申し訳ないことをしてしまったのです。姉たちは「母さまはいつも箱根・伊豆の旅行案内書を見ては楽しかったといってたわよ。東京方面をあちこち案内して差上げられてよかったわね」と感さめてくれましたけど……。

母の入院

母は、この夏の旅行から帰って間もなくして倒れたのです。最初、たちくらみがして貧血かと思っ

たそうです。これではいけないと思い、すぐに病院で診察していただきましたところ、即刻入院するよういわれました。

そして、入院一か月後に手術をいたしました。主治医のお話によりますと、二年位前から悪かったはずだとおっしゃっておられました。切除した胃も見せて下さいましたが、半分以上に病巣が広がっており、長くて一年の命だろうと宣告されました。

三人の姉たちが毎日交替で病院に泊り込み、看病いたしました。私も毎月のように、東京と門司の間を往復いたしました。母と血液型が同じだったのが私だけでしたので、鮮血輸血をするために帰ったこともございました。

十二月ころ、一時的な小康状態が訪れ、退院を許可されて翌年のお正月四日まで家で療養しておりました。しかし、私がお正月に帰省したときには、母はまるで腰が座らなくなっておりました。

そんな母を私たちは無理に連れ出して、記念写真を撮りにまいりました。私の着物の帯も、そんなゆるい結び方では駄目だと申して、母が結び直してくれました。

「写真を撮ると、母さんも死んでしまいそうだ、今年はさる年去るだもの」と申しておりました。母は、父が亡くなる少し前にやはりみんなで写真を撮りに行ったことがございましたが、そのときのことを想い出していたようでした。

記念写真と申せば、我が家の写真は、どれ一枚として家族全員が欠けずに揃っているものがございます。いつでもだれかしらがいないのです。

一月五日、病院へ診察にまいりましたところ、またすぐ入院するよういわれました。そして、十五

日ごろには肝性昏睡に陥り、生死の間をさまよいました。例年になく厳しい吹雪の日でございました。親類縁者が呼び集められました。

しかし、母は目覚めました。そして、夢の話をしてくれました。「お坊さんが向うでおいでおいでと手招きしていたのだけれど、そのうちにうしろを向いて行ってしまうわ」と。

「母さま、お坊さんが行ってしまったわね」ということは、これからだんだんよくなるということよ。よかったわね」とみんなで励ましたことでした。

けれども、母の癌は臍にまで転移していて、もうどうしようもないところまで進行していたのです。腹部には水がたまりパンパンになっておりました。

三月のお彼岸の休みを利用して帰りましたときには、アルコールで頭を拭いてあげたり、髪をすいてあげたりいたしました。

「また来るからね。元気出してね」

「あゝ、またおいで。でもあんまり会社を休んで辞めさせられるといけないから、こんどは五月の連休のときでいいよ」

母と交した最後の会話でございました。母は桜の花も、五月の連休も待たずに永い眠りについてしまったのでございます。

合 掌

あとがき

昨年、下の娘の幼稚園で敬老会がございました折に、祝辞を述べさせていただきましたが、そのとき、

母のことを想い出し涙が溢れてなりませんでした。母にも私の娘を見てもらいたかったと。

今、娘たちの知らない、娘たちにとりましては祖母になる女のことを、娘たちに伝えておきたいという思いで綴ってまいりました。

しかし、私はいまさらのように、いかに母のことを知らなかったかを思い知らされました。私は年の離れた末っ子でしたので、いつも家族の埒外にいた感があるのです。戦前のことは、下関に嫁いでおります長姉に、長距離電話をして聞きました。戦後のことは、自分の記憶をたどりながら記しました。

明治・大正・昭和と歴史の激動期を生きた母の喜びや、悲しみや、悩みや、さまざまな想いが、私自身が結婚し、妻となり、親となつてはじめて分つたように思います。

母は夫に先立たれ、働かざるを得なくて働いていたと思います。しかし、娘の私はそんな母をときにはうとましく思いながらも、深い尊敬と感謝の念を抱いていたのもまた事実でした。

振り返って、私を娘たちはどんな目で見ていたのか。

長女が小一のとき（現在は小三）、次女（小二）と大きくなつたら何になるか話し合つておりました。次女が「おかあさん」と申しますと、長女がすかさず「タダのおかあさん？」と聞き返しました。私はドキツとしました。と同時に娘もずいぶん成長したなあ、と嬉しく思ったことでした。

私どもが娘に遺してやれるものといえば、ただ毎日を一生懸命に生きている姿を見せることしかありません。そして、私の母が遺してくれたものも、まさにそのことにはかならなかつたと思います。

亡母や兄姉たちのこれまでの苦勞を思うとき、遮二無二頑張らなければという思いに衝き動かされます。そして、幸せな気持ちで毎日を送ることが、母への何よりの供養と思つております。

【寇のうた——娘がつづる母たちの歴史——】一九八一年三月二十五日発行（考古堂書店刊）より転載）

私のこの一年

先日、近畿おやこ劇場連絡会の学習会で大阪市立大学の宮本憲一先生のお話を聞く機会がございましたが、その中の「歴史は未来の道標である」というお言葉に非常な感銘を受けました。それは、今、教科書から特に歴史的叙述が削除されているということからのお話だったのですが、私どもが女性史を学び「母の歴史」を書いたことは、まさに女性である私自身の未来の道標をみつけ、うち立てるためであったのだということを、はつきり認識させてくれました。

思い返せば昨年の四月、出来たばかりの『竈のうた』を持って大阪へ越してまいりましたとき、気持ちが悪くなくて何も手につかず、ゆううつな毎日を過ごしておりました。新潟に三年半、やつと足がかりがつかめたと喜んでおりましたのに、また、この新しい奥深い土地で一からやり直さなければならぬかと思うとうんざりでした。夫からはしきりに仕事をすればと言われ、私にはまるで強迫されているように思えました。

時間はたつぷり、静かも静か、朗読のテープ吹込みにはもってこいの環境ですのに、あまりにも静かすぎて不気味でした。人と会って語らうことの楽しさ、素晴らしさを思い起こしておりました。

そんな折、偶然にも高校時代の友人に再会し、その方を通じて地域の生協や児童文庫にも参加させて頂くことができ、本当に幸運でした。聞けば、豊能おやこ劇場も小規模ながらあったりして、だんだん

嬉しくなってきました。

五月には新聞に大阪市婦人会館の「婦人問題講座、女性史コース・女性論コース」の募集がのりました。これを逃してはならじと、どのくらい遠いのかも、日時も確かめず、女性史コースに応募したのでした。開講式に行つて初めて、生協の荷が来る日と重なることが分つたのですが、生協のほうは娘二人に頼んで通うことにしました。

ここでも貴重な出会いと学習経験を積むことができました。一応、米田佐代子さんの『近代日本女性史』がテキストでしたが、色々な資料の読み方、自分たちで調べる学習法を学びました。そして、近代日本がいかにか戦争と密着していたか、しかも侵略するのみであつたか、その依つてきたところ天皇制の問題にまで達着しました。

一年次修了論文テーマは「戦争と女性」。本の丸写しになりそうで、それでも、多少なりともオリジナルティを出したいと四苦八苦でした。そして、三月には婦人会館展が開かれたのですが、女性史コースでは、学んで来た締くくりとして映画『侵略——語られなかった戦争』の上映とフリートークキングを企画しました。

「私たち日本人が戦争を語る時、その多くはヒロシマ・ナガサキであり、空襲であり、学徒動員であつた」けれども「中国・朝鮮への侵略とその泥沼化の帰結として、ヒロシマがあり空襲があつた」という作者の言葉が、重く胸にひびいてきました。

二年次はセミナー方式で、自分たちでテーマを決めて取組むことになりました。一人一人が自分の興味あるテーマを出し、その中から共通点のある者同士が四、五人でグループを作るのです。

私どもは「男女の役割分担の意識がいかに形成されてきたか、今なおされつつあるか」に取組むこと

になりました。女子教育、社会通念、マスコミ、婦人団体、行政の施策等から調べてみては、といったあたりまで話し合いが進んできたところですが、まだまだ煮つまるどころまで行かなくて、どうなるかとやらといった段階です。

ざっとこの一年間を振り返ってみました。今ようやく一つの結論らしきものを得ました。それは、女性史を学び、いろいろな本を読み、仕事を持ちながら学習しておられる仲間と接するなかで、私もやはり仕事をしなければということです。特に倉元さんからお送り頂いた「報告集・戦争への道を許さない女たちのつどい」の中の「妻子を養うことを口実に、男たちが戦争に協力することのないようにするために、女の経済的自立が必要である」という中島通子さんのお話に啓発されました。

確かに、ここ数年、家庭婦人の、主婦の社会参加ということが言われるようになり、行政の側もいろいろなボランティア養成講座を開いて、その養成に努めています。私自身そういう講座に参加し、ボランティア活動をしたと思うておりましたが(今でもその思いに変わりはないのですが)、うかうかとい気になってそれに乗っていると、日本型社会福祉とやらで、主婦の無償の善意がますます軍事予算を突出させる状況を作り出すことにもなりかねないと、最近思えてきたのです。戦前の国防婦人会が、いま流に申せばボランティア活動から始まったように。――福祉に対する要求運動にも、同時に取組んでいかなければならないのだと思います。

また、仕事も家事も育児も両立させることが人間としてあたりまえになるような、女が男並みになるのではなく、むしろ、誤解を恐れずに申しますなら、男が女並みになるような世の中を目指したい、という思いから仕事を始めました。

イギリスで始まった産業革命から、初めて鉄道が敷かれ（一八二五年）てからまだ百五十年しかたっていないというのに、人類は宇宙にロケットを飛ばし、核による破滅をも招きかねない現状に至っています。

このあまりにも急速な進歩？は、効率のみを優先することから得られました。そしてそれは、とりもなおさず効率の悪い女性を、障害者を、老人を、子供を差別して切り捨てることだったのです。

申し遅れましたが、私の仕事は管理薬剤師、嘱託として週三日、十時から十四時まで薬店で販売の仕事をしています。実際に働いてみると想像以上に厳しいというのが実感です。特に体力的に……。たったの三日間ですのにとっても疲れます。

さらに我ながら情けないのは、「まさかの時のために」薬剤師の資格をとりましたのに、まさかの時になつてからでは全く役に立たないことを当然のことながら思い知らされたことです。私どもが十七年も前に学んだことは、古色蒼然、殆んどカビが生えそうなくらい役に立たず、毎日恥をかきながら一つ一つ勉強のやり直しをしています。

しかも薬害が云々され、私自身殆んど薬を信用していないといつてもいいくらいなのに、薬を売らなければならぬこのジレンマ。

「きれいな事言つて、誰のお蔭で（薬剤師は）給料もらえるのや。わしらが（薬を）売つたるからやで。薬剤師を人間と思ふな、看板やと思え」と若い人には言っているというある店長さんのことを身の置き場もない思いで聞きました。（この店長さんも私などよりずっとお若いのですが）。

しかし、「矛盾を生きることが人生」と思い定めて、とにかく今は働く感覚を取り戻したい、これからの医学は予防医学の方向へ進むと思うから、私も健康相談を引受けられるような力をつけたい、その為

にも勉強をしなければと思つてゐるところです。

実を申しますと、四十歳からの再出発に氣おくれとしんどさを感じていたのですが、夫から「まだ四十じゃないか」と言われました時に、人生八十年になんなんとしている現在、確かにやっと人生の折返点にきたのですから、今から老け込んではいられないのです。あせらず、ゆるやかな歩みを進めていきたい、働きながら学ぶということをやつていきたい、と思つてゐる今日この頃でございます。

『二寇のうた』から一年たつて 私たちの活動記録集』 一九八二年五月二十五日発行より転載)

小川藤子さんに学ぶ

今年もまた八月十五日が巡つて来ました。東京が大空襲で壊滅する前に、沖縄での地上戦が始まる前に、遅くともヒロシマに原爆が落とされる前に、せめてナガサキに原爆が落とされる前になぜもつと早く戦争を終結することが出来なかつたのかと齒噛みしたい気持ちになります。私が現在住んでおります大阪の京橋近辺では、まさに敗戦前日の十四日にも大空襲を受け二百数十名の方が無念の犠牲を強いられています。

しかしそれよりも何よりも、なぜこんな無謀な戦争を起こしてしまったのかという思いでいっぱいです。戦争という狂気は始まつたが最後、つづつ走つてとどめようがない、だから戦争を起こさないように、危険な芽が見えたら一つ一つ摘みとつていく作業をしなければいけないのだと痛感いたします。

小川藤子さんは徹頭徹尾、戦争反対の方でした。最後にお会いいたしましたのも新潟で開かれた〈戦争への道を許さない女たちの会〉の集まりでした。四年程前だったと思います。そういえば少しお疲れの様子だったなあとしみじみと当時から僥倖されます。もうすでに病氣を抱えておられたのかもしれないと今にして思い至ります。

もっと長生きして頂きたかったと心の底から思います。藤子さんも「やり残した事がある」とおっしゃっておられたそうですが、どんなにかおつらく、無念だったことでしょう。二十一世紀を見届けたかったに違いありません。

藤子さんとの出会いは、夫の転勤に伴って新潟へ参りまして間もなくの頃、一九七七年の初冬だったと思います。中央公民館主催の講座、たしか「手紙の書き方」の講師で来られていました。終戦後、中国東北部や朝鮮半島から命からがら引き揚げて来られた方からのお手紙にまつわるお話でした。戦争に対する怒りと、深い悲しみと悔恨の思いの中にいる女性たちへの限りなく暖かなまなざしと優しさに溢れたお話でした。私も状況はだいぶ違いましたが、一九五三年に中国東北部から引き揚げて来た一人として感銘を受けました。

何がきっかけでしたか記憶は定かではありませんが、私を新潟日報家庭欄の記者の方へ紹介して下さいました。私が社宅で読み聞かせの会をしているのを記事にするというのです。私は何ほどの事をしてるわけではありませんでしたし、新米の社宅住まいでしたので固く固くご辞退したのですが結局記事にすることになりました。次に、では名前はどうしましょうということになりました。当然仮名でお願いしますと申しました。その時です。藤子さんが何故本名ではなく仮名にするのかと、いつものにこやかさとうって変って強くおっしゃいました。勇気を持って行動しなさいと。でも私にはまだその勇気が

ありませんでした。

藤子さんは発言し行動する勇氣ある方でした。遺稿集を拝読してあらためてその思いを深くしました。意識と行動が一致している誠実な方だったと感動いたしました。

わずか三年半余の短い新潟滞在でしたが、私にとりましては心のふるさととも言える懐かしくも大切な街となりました。とりわけ藤子さんとの出会いは私の大切な宝物の一つです。

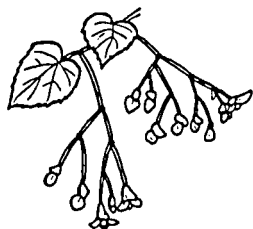
新潟市はハルビンと姉妹都市だとか。私がハルビン生まれと知って、藤子さんが一緒に参りましょうと仰言つて下さいましたが、その後すぐに新潟を離れてしまい実現しなかったことが唯一いまでも心残りです。

いま私自身、思いもかけない病の中にあつて、藤子さんはどんな思いで日々を過しておられたのだろうと我が身と重ねて考えます。どんなにかおつらかったと思います。どうぞ安らかに眠り下さい。

合掌。

『小川藤子 うす紫の記憶』一九九七年十二月三十日発行（発行者・関徹 越書房刊）より転載）

※一九九七年九月に書かれたこの文章が白井さんの絶筆となった。



NPO法案施行——市民団体は冷たい反応

鳴物入りで成立したNPO法（特定非営利活動促進法）が12月1日施行。経済企画庁と各都道府県の窓口で法人格取得の申請が始まったが、12月10日現在、受付数は10団体程度。提出書類が六十数枚も必要で、提出後は情報公開を要求され、税制上の優遇はない、等が、不人気の理由。

もともと非営利団体はボランティア（自主的）な活動が軸。行政の不備を補うものとして発足している。申請して活動状況を把握されたり課税されたり、行政の下部構造に組み込まれるのはイヤという拒否反応に加えて、NPOへの寄付に対する税の免除や、郵便物がほとんど無料になるなどの諸外国のNPO法のようなメリットはない。NPO法はNPOを一網打尽にする布石では、という疑念も深い。信頼できる政府が生まれ、第四セクター方式などNPOの権利を確立するシステムが出来ないかぎり、安い労働力で高

齢社会を乗り切ろうとする政府の狙いは、から振りになるだろう。

「裁判官の積極的な政治運動禁止は合憲」
寺西判事補に最高裁が戒告

寺西和史・仙台地裁判事補は、今年4月18日に組織的犯罪対策法三法案反対の市民集会「盗聴法と令状主義」に参加し、裁判官という身分を明らかにした上で会場から発言した。当日の集会に私も出席していたが、寺西氏は「パネリストとして名が出ているが、辞退した」と断ったにすぎない。しかし、これを政治的活動として、仙台地裁は5月1日に寺西判事補の懲戒を仙台高裁に申し立て、7月に戒告処分が決定。それを不服とした寺西判事補は最高裁に即時抗告したが、12月2日、最高裁は憲法の保障する表現の自由について「裁判官の言動は一定の制約を免れない」として懲戒を合憲とし、判事補の抗告を棄却した。

とはいえ、十五人の裁判官のうち五人は戒告を否定。マ

スメディアも疑問を呈している。この判決にめげず、裁判官は、諸外国の判事のように、自由な意見を果敢に述べて、「司法の独立」を守ってほしい。

(千)

「憲法調査委員会」上程は来年の通常国会に

〈憲法調査委員会設置推進議員連盟〉(中山太郎会長)には、現在超党派議員三五六名(社・共はゼロ)が参加しており、委員会設置のための国会法改正案は、来年の通常国会に提出される見通しになった。

改憲に反対する「STOP!改憲・市民ネットワーク」など十五市民団体は、12月8日に参議院議員会館で議員と市民との討論会「いまなぜ国会に憲法調査委員会か？」を開催した。

「米海兵隊は日本にいらない」意見広告、米紙に掲載

『あこら241号』既述の「米海兵隊は日本にいらない!」米紙意見広告運動は、大分県湯布院市の住民が事務局となつて約八百万円(八千人分)のカンパを集め、11月23日

にニューヨークタイムスに全面広告を掲載した。

タイトルは「It's Time to Bring U.S. Marines Home!」(今こそ米海兵隊を日本に呼びもとすとき!)。写真は、先月名護沖で撮影されたばかりのジュゴン三頭、それよりやや小さく、米軍基地の鉄のフェンスを挟んで、基地の中にある拝所に向かって頭を垂れている沖縄の人びとなど四点。先日沖縄知事選で惜しくも敗れた大田昌秀氏のメッセージも掲載。

事務局は今後、昨年の意見広告と同様に、米市民からの反響を日本語に翻訳して報告する。

◆連絡先 TEL/FAX 0977・85・5003

胎児診断に厚生省専門委員会が「待った」

女性や「障害」者団体が激しく抗議していた胎児診断のうち母体血清マーカー検査について、厚生省の専門委員会(委員長・古山順一兵庫医大教授)は、「検査について医師が妊婦に積極的に知らせる必要もなく、検診を勧めるべきでもない」とする見解書を12月9日、初めて公表。一般からも意見を募り、来年三月をメドに指針案をまとめる。

女子大生、働く権利で労相に請願

来春卒業予定の女子大生の四割が就職未定。12月5日、

〈就職難に泣き寝入りしない女子学生の会〉の十六人が労働省を訪れ、「公平で公正な就職活動のルールを学生の意見を取り入れて作ってほしい」などの請願書を、苦悩する学生の声を集めた資料集とともに、甘利労相に提出した。

高校生の就職難さらに深刻

12月1日発表の文部省の調査によると十月末の高校生就職内定率は、男子65・4%、女子59・7%、平均62・7%で、この二十年間で最低。特に沖縄県は19・3%。女子大生以上に状況は深刻。

米国二州でアファーマティブアクションを廃止

日本では男女共同参画社会基本法に「ポジティブ・アクション」が明記されたが、米国ではカリフォルニア州に続

き、ワシントン州が、11月3日廃止を決定した。「逆差別」「これだけでは差別は解消されない」等がその理由。これに対し、存続派の巻き返しも激化、全米に波及の模様。

ピル承認の道、未だ不明

厚生省の中央薬事審議会は12月2日、低用量経口避妊薬（低用量ピル）の安全性と有効性について内外一〇五種類の文献を検討した結果を中間発表、資料や文献名を同省ホームページで公開したが、将来展望については語らず、ピル承認への道筋は不明。

ホームページアドレスは <http://www.mhw.go.jp>

ケアマネージャー試験に九万人が合格

先月号で紹介した介護支援専門員（ケアマネージャー）の初の試験結果が、11月27日、厚生省から発表された。四十七都道府県で二〇万七〇八〇人が受験、九万一二六九人が合格。合格率は44%。各都道府県での実務研修を終えるとケアマネージャーとして就業できる。介護保険制度の中

核となるこの職種は、二〇〇〇年四月、全国で四万人が必要と厚生省では試算している。

なお国家資格別合格者は、正・准看護婦、正・准看護士がトップで三三％。次回の試験は99年7月25日。

大学内でのセクハラ防止に、対策委設置の動き

大学内のセクハラの告発が相次ぎ、九大、国際基督教大、東経大等が、セクハラ防止委員会・対策委員会を設けることに踏み出した。〈キャンパス・セクシュアル・ハラスメント全国ネットワーク〉によると、98年4月時点で、法政・和光・三重・鳴門教育・高知大、京大文学部がセクハラ対策をとっているが、98年10月の文部省による初の調査（四大五八七校、短大五一五校）では、設立予定があるのは四大6・6％、短大8％のみ。被害女性のプライバシーをいかに守るかなど、細かい対策も、まだ不十分。

年末に保育園が「一時預かり」

東京都品川区は、12月29・30日の二日間、区立三十七保

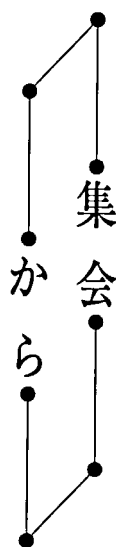
育園のうち十二の保育園で、商店街の働く母の子の一時保育を実施する。生後四か月から五歳児まで、午前七時半から午後六時までで、費用は一日千五百円、昼食・おやつ付き。

死刑囚に執行日通知を

永山則夫の死刑執行など突然発表されて、死刑への疑問がさらに深まっているが、中村正三郎法相は12月3日、参院法務委員会で千葉景子氏（民主）の質問に、「執行日をあらかじめ伝え、親族の面会などができるよう運用の見直しを検討する考えがある」ことを初めて明らかにした。

北海道、行政オンブズマン制条例化へ

北海道は、道行政への道民の苦情を中立の立場で調査・処理する行政オンブズマン制度を道議会に提出する。民間の審査員二人を知事が委嘱、審査員は苦情を審査し、業務や制度に対する是正勧告、意見表明ができる。可決されれば、都道府県では全国初。



「世界人権宣言五十周年」記念集会「女性への暴力」分科会

国際婦人年連絡会が十一月二十一日（土）、東京四谷に落成したばかりのプラザ・エフ（主婦会館）で開いた「世界人権宣言五十周年——男女平等社会に向けて」記念集会に参加した。

午前は、国連婦人の地位委員会日本代表・目黒依子氏の基調講演。午後は高齢者福祉、女性への暴力、労働・経済の三分科会。私は「暴力——なくそう女性への暴力」に出て、まず三氏の報告を聞いた。

都の「女性に対する暴力」（行政として初の本格的総合的調査）に携わったゆのまえ知子氏は「暴力許容意識には男女差があり、特に性別役割分担意識と関連性があることが今回の調査で明らかになった。公的機関に相談した者は際立って少なく、最初の暴力は、結婚五年目までに八割が体験している。被害者の六割は子どもも暴力を受けていると

いう。彼女らは暴力許容意識がなくなること、避難場所の提供を望んでいるが、社会的対応が遅れている」と。

都女性相談センター相談員の原田恵理子氏は「女性相談センターは売春防止法に基づき要保護女子の施設として発足した機関で、全国と同センターの定員は六六八人。東京都は六十人だが、地方では定員四人の所もあり、他県から東京に逃げてくる例も多い。被害件数は五万件以上。骨折首をしめられるなど一人の女性がいろいろな暴力を受けている。妊娠がわかった時点で夫が姿をくらまし、中絶するにも金も相談する人もいない」などと実例を報告した。

矯風会HELP（女性の家）のコーディネーター東海林るつ子氏は「HELPは日本人も外国人も受け入れるが、外国人の場合、人身売買の疑いもある。彼女らは日本人の客はサディストが多く、人間として扱われずみじめさを感じるといふ。外国人妻の場合は、ビザ更新・住まい・言葉・文化の違いなど問題が多岐に渡るが、日本の夫婦のあり方とも合わせて考えなければならぬと思う」と。

質問や意見は活発に出たが、私がショックだったのは、暴力を振るう男性は病気ではないか、との質問だった。女性への暴力は、個人的原因もあるが、むしろ社会に問題

の根がある。目前の被害者をどう援助しサポートするかの対策とともに、暴力を生む社会的背景を探り、どう取組むかを討論すべきだが、論議はそこまで深まらなかった。

(半田たつ子)

地位協定の見直しを求め、新たな基地建設を許さない集い

十二月一日夜、〈沖縄・一坪反戦地主会関東ブロック〉が主催して東京・両国の江戸東京博物館会議室で開催されたこの集会では、新崎盛暉沖縄大学教授（一坪反戦地主会代表世話人）が沖縄県知事選挙結果の分析と選挙後の沖縄の状況、今後の展望について報告した。

新崎さんは今回の知事選を「稲嶺氏と大田氏の闘いというよりは、日本政府と沖縄県との闘いだった」と位置付けた。大田知事が初当選した時は、保守の西銘前知事の求心力が衰えて自民党内にも支持を失い、二回目の当選の時には大田知事への支持が厚くて保守にも闘う気がなかったが、今回は保守にとっても負けられない総力戦、公告縦覧の応諾などで大田知事の求心力が薄れていたところに付け込まれた。しかも稲嶺陣営は徹底した自民党隠しと同時に、

広告代理店の力を借り（電通社員約五十人が入った「県政不況」などのデマゴークに近いキャッチコピーでたくみな世論操作を行ない、その上〈勝手連〉なるものまで作って、普選選挙に行かない層を引きつけるのに成功した。

それに対して大田陣営は最終段階で問題を「基地」に絞り込んだが、資金力の格差は明らかだった。この展開は名護市長選とそっくりであると、新崎さんは分析した。しかし、「弱将は落馬しても強兵は残った」と新崎さんは言い切る。事実、大田知事の得票数は過去最高の三十三万票余り。この支持は無視できない。

一方、当選した稲嶺氏は「普天間基地陸上移転案」を公約に立てたことで、窮地に立たざるを得ない。海上へり基地案は住民投票ですでに否定されているので、県内移設なら陸上に移転するしかないが、軍民共用は安全上不可能だし、稲嶺氏の主張する十五年の期限付き使用はアメリカ国防総省が否定していて可能性がない。県民の側に立てば日本政府と必ず矛盾が起こる。日本政府には「基地を作ってしまえばこっちのもの」という腹がある——と警告。

「日米安保条約は国政レベルの問題なのに、地方選の争点になるのはおかしい」という新崎さんは、本土の人間が

「高見の見物をやめない限り変わらぬ」と厳しく指摘する。例えば実弾演習地が矢臼別や日出生台に移転しても、本土全体の問題にはならず、地域限定の問題になってしまっている。問題は基地の移設先が「県内」か「県外」かではなく「安保があるから基地がある」という事実。安保体制そのものを変えるために、大田知事を担がずに日本政府と対立する陣営をどう結果させるかがこれからの課題。「安保を国民投票に」という提言で締めくくった。

「地位協定に対してどう取り組むべきか」という会場からの質問に新崎さんは「九五年の秋の段階で沖縄県は国に対して十項目の地位協定見直し要求を出しているが、SACO（沖縄に関する特別行動委員会）は協定自体の見直しを出さずに運用上の改善点だけを出している。犯罪米兵の身柄引渡しの問題で言えば、起訴までは米軍が基地内で身柄を確保することになっている。それが捜査の妨げになるのだが、SACOの結論では強姦事件などの凶悪犯についてだけは日本の警察に好意的な配慮することになった。私たちが今後追求していくべきことは、なぜ米軍人だけが特別な待遇を受けなければならないのか、なぜそのようなことを押しつけられるのかということ。同じ動きは韓国で

も起こっている」と答えた。米軍が駐留する国同士が手を結んで、米国に強く要求できるネットワークをつくる必要性を感じた。

（あ）

「安保」と国民投票

十二月五日（土）東京YMCAホテル会議室で開かれたこの討論会は、一時半から六時半まで五時間という長丁場にもかかわらず、参加者を交えた熱い激論で最後まで盛り上がった（主催は国民・住民投票を生かす会）。

基調講演は石川真澄さん（元・朝日新聞論説委員、新潟国際情報大学教授）。パネリストは小川和久さん（国際政治・軍事アナリスト）、鈴木邦男さん（評論家・一水会代表）知花昌一さん（反戦地主・沖縄県読谷村議会議員）宮城康博さん（ヘリ基地反対協代表・名護市議会議員）。コーディネーターは「大事なことは国民投票で決めよう！」の著者、今井一さん（ジャーナリスト）。

各国の国民投票事情に関する講演の後、会場からさつき「今、日本で安保を国民投票にかけたとしたら、きつと安保が支持されるだろうから、やらない方がいい」という

意見が出た。これに対して「住民投票は運動であり、法的拘束力はない。負けてもまたやればいいではないか」という意見も出て、論争の火蓋が切つて落とされた。

宮城さんは「安保が沖縄にだけ押しつけられてる現実を何とかしたい。日本国民が一人ひとりの責任で安保を考え、投票すれば、結果がどうあれ安保に関して責任をもたざるを得ない」。石川さんは「おろかな民に重要なことは決めさせるな」という議論が必ず出るが、それは政府が国民を信じていないからだ。憲法的重要問題は国民投票で決めた方がいい」。小川さんは「安保は一方の国の通告で破棄できるが、破棄されるのを恐れているのは実はアメリカ。アメリカのリーダーシップを支えているのは日本だけ。基地のある自治体とない自治体で温度差はちがうが、きちんと情報公開して当事者意識を育て、その上で『安保』を国民が選ぶのか問うべき」。鈴木さんは「私は右翼団体の者だが、国旗国歌も国民投票にかけていいと思う。安保を廃棄して日米友好条約を締結という意見(共産党の志位書記長などは結構なことだが、それに向けて具体策があるのかどうか)だ」。知花さんは「安保を国民はあまりにも知らない。たとえば海兵隊は安保の規定に入っていないので安保違反のは

ずだが、それも知られていない。まず知らせるためにも国民投票を」。今井さんは「今年住民投票の請求があつた自治体は十四あつて、そのうち二つで実施された。世論調査でも住民投票への関心は高い。ただ、国民投票となれば新たな法律をつくらなければ出来ないが、国民の関心はあるはず」と、全員国民投票に賛成。

だが、会場から「住民投票は慎重にすべき。いったん安保支持が勝つたら、政府は『これが世論だ』と強気になるし、二回目の投票は多分できない。国民みんなが安保に関心を持つとは思えない」という強力な意見が出たことから議論は白熱。「国民が無関心と初めから決めつけるのはおかしい」「いきなり安保より、『地位協定』『思いやり予算』を変えさせる投票を先にすれば」などの発言のなかで、宮城さんの「国民に問わずにこのままズルズル行くのは、国民投票で安保が支持されるよりもっとひどい」という発言が光った。確かに、これからも沖縄に安保を押しつけて、無関心でいいんですか? という突き付けを国民一人ひとりにしなければ先へ進めない。結論として、慎重論を十分改重した上で、二〇〇一年か二年に国民投票を実現させる運動を作ることが提案された。

(な)

新ガイドライン・周辺事態法について女性議員との懇談会

来年一月からの通常国会での論議が危ぶまれている周辺事態法。開戦の日の十二月八日（火）に「止めよう」「戦争協力法」8・29女たちの集い」実行委員会が、全女性国会議員に呼び掛けて、衆議院第二議員会館で懇談会を開催した。当日参加したのは社民党が土井たか子党首、辻元清美、中川智子（以上衆）、大淵絹子、清水澄子、三重野重子（参）、民主党が松本惟子（衆）、小宮山洋子（参）、共産党が瀬古由紀子（衆）、阿部幸代、吉川春子（参）、無所属が高橋紀世子（参）の十三名。代理の議員秘書も七名参加したが、自民党・自由党はゼロ。平日午後の三時半開催にもかかわらず会場は満員。

土井さんが「周辺事態法は先送りされても政府はあきらめない。周辺事態法は憲法の解釈の幅をさらに広げないと対応できない法律であり、このために平和憲法自身を変えようと憲法調査委員会を作った動きが国会内で盛んになっている。私たちは断固反対する」と決意を述べると拍手が。同日、参議院議員会館では「憲法調査委員会」に反対する

市民による討論集会も開かれており、共産党の瀬古議員もそのことに言及した。

民主党の小宮山議員は党のガイドラインに対する方針が決まっていないので「はつきりしたことは言えない」としながらも、「軍備ではなく人と人との信頼関係で安全保障をするべき」と自身の意見を述べた。民主党の姿勢に対しては、会場からも批判の声が上がった。

辻元議員は衆議院安全保障委員会で委員三十九人のうちただ一人の女性。「安保委はテボドン事件以来ヒステリック。小さい党は発言の機会も少ない」と実情を述べたあと、党を越えた横の連帯を作っていきたいと話し、各自自治体での反対運動、周辺事態法に協力させられそうな職場や組合での闘いを強化する必要性を強調した。自治体の取り組みに関しては、三多摩の古荘斗糸子さんから市町村アンケートの結果「三多摩三十一自治体のうち、基地を抱えている十一市町村では予想外に深刻に受けとめているが、基地のないところとの落差は大きい」という実例が報告された。

集会後は、戦争への道を許さない女たちの連絡会」の主催で衆議院と参議院に「新ガイドライン有罪法制化に反対する請願」を届けるデモを。請願は今後も継続予定（わ）

でも全身のイメージが強いので、首や肩のような部分部分へのこだわりが薄いのかとも想像してみる。

こんなことをとめどもなく考えていると、生活が違い文化が違ううえに言葉もちがうのだから、ものの捉え方や考え方がいろんな国でずれるのは、ごく当然と思えてくる。まして捉えどころのない精神や心がからむと、ネーミングはさらに難しく、新しい学説で異なるネーミングをすれば、その名とともにおもむきも変わったり新しく見えてくるものも出てくるはずである。

表題の語は、長年ネーミング無しと思い込んでいたので、こんな名が付いていたのかと初対面で懐かしかった。まさにデジャブ（既視感）。見つけたのは朝日新聞、「こころ」というコラム（10/27 '98）である。

成績は優秀なのに志望の大学に落ち、予備校に入ったが正体不明のふらつきに悩み、耳鼻科をはじめ転々としたが原因不明。最後にやって来たのが心療内科という女性の話。「数学恐怖症みたい」と訴えられる先生も、そのむかし数学ができなかった。でも理系クラスだから数学が苦手と明言できない苦しい立場。で、どうしたか？「そう、数学は勉強しないと決め込んだ」と、コラムの書き手中川品氏。当然成績は下がる。でも驚きはしない。だって勉強していないのだから。やっても出来ないと証明してしまうよりはずっとまし、恐ろしくない。

「実はこの変わった心理状態を社会心理学ではセルフ・ハンディキャッピングという理論で説明がついている。多くの人々が自らの成功を阻害するように振るまうのは、失敗それ自体よりも失敗が自分に対してもつ意味のほうが大きいと考えてしまい、この種の自滅的行動に出るといわれている。つまり自分にハンディキャップを負わせて、先に結果の弁解を用意しておくのである」「僕は……最後に追いつめられて、自分は数学音痴なんだと観念して勉強しました」と話し、それを聞いた彼女は「数学恐怖症」から「数学音痴」に病名を自ら変更し、ふらつきはまだ少しあるものの、なんとか頑張っている、という。

「セルフ・ハンディキャッピングを外すには、結局自ら恐怖の方向に飛び込むしかないようである」と著者はコラムを結ぶ。ここから本番（私自身の話）と思ったところで、紙面が尽きた。毎度のこととはいえ、困ったものだ。

Self—handicapping

(セルフ・ハンディキャッピング)

奥川 睦

もし物に名が無かったら、その物はある意味では存在しない、と言える。例えば、「肩凝り」。赤ん坊や幼児はもちろん、そんな言葉など知らない人は、大人でも肩など凝らないのだから、言葉と同様に症状も存在しない。肩凝りの症状が苦になり始めたら、早晚「肩凝り」という言葉にも出会ってしまうに違いない。そうやって初めて、その言葉で表される症状がはっきり認識され、その時初めて症状も存在する、と言えるのではないか。その言葉に出会うまでは、たとえ症状を抱えていたとしても、はっきり意識された症状ではなく、それは有って無いのである。

なにやら詭弁めくが「白馬非馬論」のような例を持ち出さずとも、理解はできると思う。ギリシャの哲人だったか、「おかしいから笑うんじゃない、笑うからおかしいんだ。悲しいから泣くんじゃない。泣くから悲しいんだ」と言った人がいた。これもすごくわかる。

非行少年と日々対話している家裁の調査官の方が「彼らは恐ろしく語彙が少なく、仲間内で通じる数語で会話を済ませてしまう。でも、少しずつ心を開き自分の言葉でしゃべり始めると、しゃべることでそれまで希薄だった自分の行動に輪郭ができ、言葉にすることで、自分や自分のやってきたことが客観的に受け止められるようになり、その土台のうえにやっと罪悪感や反省への道筋が描ける」と話しておられた。「言葉は偉大だ」と改めて思ったものだ。

英語に「肩凝り」はないと聞いていたので、ケンタッキーではよくこの質問をした。症状がないのではなかった。でもそのことにあまり意識が引かれるということもなく、言葉は比較的、希薄。あえて言うなら“stiffed shoulder”か、と言われうなずいた。今、和英辞典で見ると「肩が凝る」の項には feel stiff in one's shoulder, have stiff shouders の二つがあり、I have a stiff neck. (首が凝っている) も見つかる。辞書を引いてみて stiff は形容詞 (副詞・名詞) はあるが動詞はないことに気付いた。動詞は stiffen だから、“stiffened shoulder” の聞き間違いだったのだからとも思うが、流通するとすぐ動詞にして使ってしまう英語のことだから、聞こえたままだったかもしれない。動詞としては、massage (マッサージ) のほうが目につく。そうなるとうし

ゴラン高原の林檎

飯岡 祐保

もう今年も暮れようとしている。昨秋、私たちゴランPKF違憲訴訟原告団一行九名は、はるかゴラン高原にいたのだと思ひ出す。

兵隊さんから

イスラエルの占領地マジタルシャムスがすぐ目の前にあるシリアの駐屯地アインティーネ（叫びの谷）に行った時（警戒の厳しい国連軍の検問所に隣接して必ずシリア側の検問所があり、バスの中の人数が調べられる）私たちは不思議なことに兵士たちと言葉を交わすことができた。

そこはポツンポツンと見張所らしい小屋があるだけの、殺風景な小さな丘（荒地といった方がいい）で、向う側（イスラエル占領地）は丘にびっしりとスラム街のように家がひしめいている。あとでわかったことだが、イスラエル側が宅地拡張を認めないので、屋上屋を重ねる建て方をして住宅が密集しているのだった。ゴラン高原に居住を認められているのは、イスラム教徒の中でも多数派を占めるシーア派の人びとではなく、（彼らは難民として各地に散った）かくれキリスタンさながらの少数派、ドルーズ派の人びとだけだった。彼らはキリスト教徒とまざって暮らすため、イスラム教の戒律である断食や聖地

巡礼などほしないで、白頭巾に黒衣を着けて暮らしている。

ここは、登山言葉のお花を摘む以外ない。「地雷に気をつけて、あまり遠くへ行かないで……」と声をかけられながら、適当な場所さがしをしていたら、ウマイヤッド・モスクで見たようなお墓が、枯れたあざみのような草に取り巻かれて、ひっそりとあるのに気が付いた。「戦死者たち」と直感した私は、早速、兵士の一人に聞いてみた。やはりそのとおりであったが、「何人か数は不明。多数の……」という返事だった。

日本にあるような葵の花を見つけて、かたわらの兵士に許可を求めると「カメラOK」だった。彼は「花は平和のシンボル」だと言った。バスにもどる途中、何かの木が植えられているあたりを、「何の木でしょう」と聞くと、「林檎」と言った。

ヘルモン山の雪溶け水に潤される高原は林檎の名産地。「林檎は好きですか」と尋ねられて、「好き」だけでは味気ないとばかり「ジャムもパイも」とつけくわえた。私たちはそれぞれ自分の年齢を言い、「私の末っ子は二十五よ」と言うと、「弟と同じ」と兵士は答えた。

それからバスに乗り込んで出発を待っていると、あの兵士が乗り込んできた。「何かヤバイことでも……」と頭の中を疑念が横切る。すると彼は私をみてにつこり笑い、手にした袋をさし出した。薄黄色の地に水色の太い縞模様のビニールの袋の中にはキッチン人数分の林檎があった。大人のにぎりこぶし大の大きさで、黄色つばい、昔あったゴールデンデリシヤスに似ている。たちまち良い香りがたちこめる。帰りの飛行機の中で、アルコール入りティッシュで拭いて皆に配り、丸かじりしてみると、ほのかな甘味のすばらしい味であった。

彼は私に、母親のような年の人と親しみを抱いたのだろうか。貴重な食料だろうに申し訳ないような

有難いような……彼の平和への祈りは私たちと共通なのだと言酸っぱさが心をひたしていった。

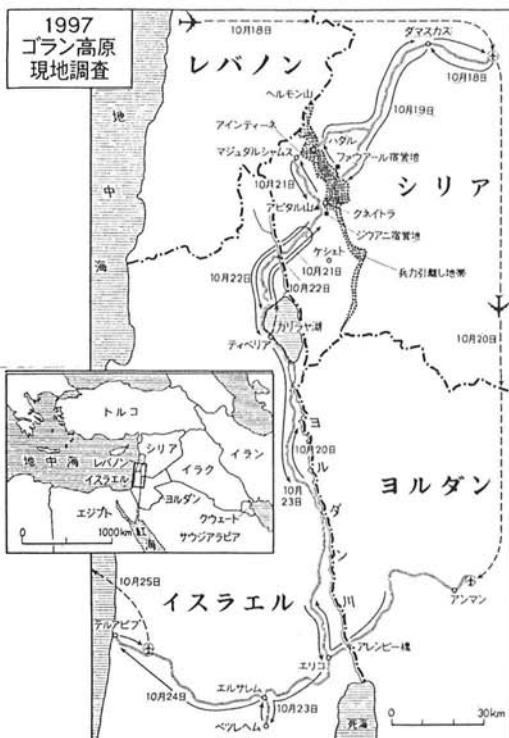
長老さんから

アインティーンからの帰り道、せまい坂道を手洗拝借に及ぶべく、バスは民家にとまった。すると頭に白布黒衣姿の長老と思われる人から林檎をさし出された。ペランダに鈴なりになった一族の人びとは、幼児も若い女性もわんぱく盛りの男の子も含めて、よろこんでカメラに収まって下さった。一般にイスラム教徒は写真にとられることを嫌うから、うっかりカメラを向けてはいけないと出発前に受けていた注意がうそのよう。

ぶどうをいただいた人もいた。バスの中で皆で分けあつて口に含むと、日本で食べる商品化されたぶどうとは違う、地味だがしっかりした味と強い香りが口いっぱいに拡がった。果物本来のもつ本当の味を知らされた思い。見てくれだけをねらつて、やたらに大きくしたり、飾りたてたり、お化粧をほどこされていけないのがすばらしい。

ホテルにあつたトマトも皮は固く、大きさ不ぞろいながら、新鮮な色つや。子どものころ食べたトマトの匂いと味を持っていた。

ここには、私たち都会に住む日本人がとうの昔に失ってしまった本当の値打ちが人にも物にも表れていた。苦しい生活を強いられているはずの人たちから友好の印を受けて、とても励まされた旅だった。帰路のイスラエルでは、今も花輪のささげられているラビン追悼碑を目のあたりにし、日本にこのように国民に惜しまれる首相がいるだろうかと考えさせられた。



バスを通る道添いに「子どもを兵役にとらないで」と書いた横断幕をにかけている数人の中年女性もみかけた。高卒後二年間は、男女共に兵役に就くイスラエル。パレスチナとの平和共存支持の願いの実現は、全世界の願いでもある。

◆「ゴランPKF (UNDOF) 違憲確認、差止め訴訟の会」事務局の連絡先は

〒203-0003 東京都東久留米市前沢2-9-3 TEL/FAX 0424・72・6500



中央が長老さん。右が筆者。

「基地やならんーちむぐる大行進」

11月6日の朝、名護市瀬嵩を出発した行進団は、「基地のたらい回しはいやだ」「やんばるは基地の掃きだめか!」などと書いた思い思いののぼりやプラカードを持ち、お年寄りや子どもたち、エイサー姿や紫のマンサージを締めた人、関東や関西から駆けつけた人、通過各地での一部参加者もまじえ、米軍基地を抱える各地の住民と交流しながら、辺野古、宜野座村、金武町、石川市、具志川市、沖縄市、宜野湾市、浦添市を経由して、那覇市までの七十キロ余りを一步一步歩きました。

翌日には、10月7日に米兵にひき逃げされ、一週間後に亡くなった北中城高校三年の上間悠希さんへの黙禱をひき逃げ現場で行なった後、米軍司令部のある北中城村のキャンプ・フォスター第一ゲート前で追悼集会を開きました。悠希さんと同じ中部の高校三年生三十名以上の手で集会は進められ、大きな感動を与えました。

最終日の8日には、三百名以上が選挙戦たけなわの国際通りで県内移設反対を訴えました。

知事選は「北部に軍民共用の陸上基地」を打ち出した稲嶺恵一氏が新知事に選ばれるという残念な結果になりましたが、私たちはいつまでも落ち込んではいられません。もう一度、初心に立ち返り、「やんばるの、また狭い沖縄のどこにも新たな基地はつくらせない」との決意を新たに、さらにネットワークを広げていきたいと考えています。

（「ちむぐる大行進」実行委員会）

北部地域への「へり基地建設案」に反対し、「基地の県内移設」の撤回を求める声明

11月18日、へり基地建設反対協議会がクリントン大統領と小淵総理大臣にあてて、声明を発表した。

*

普天間基地返還問題で、政府は海上へり基地に代わる代替基地の建設候補地として東村と名護市のキャンプシュワープ陸上案の二か所に絞り、用地選定の検討に入つたとの報道がなされた。そして、野中広務官房長官は17日、県との合意にもとづき軍民共用空港案をアメリカ政府に提示すると言明した。小淵首相は稲嶺新知事と

「軍民共用空港」建設について本格的に検討する方針を表明すると言われている。さらに、時を同じくしてアメリカ国防総省が、稲嶺氏の十五年の使用期限付きは「絶対に認められない」とした上で「海上ヘリ基地」建設を条件に、日米特別行動委員会(SACO)で、返還合意された普天間基地と那覇軍港に、牧港補給基地を加えた一括返還を検討していることも報道されている。いずれにしても、日米両政府は沖縄県民の平和への願いを踏みにじり、あくまでも新たな軍事基地建設押しつけを強行しようとしているのであり断じて容認することはできない。

国防総省の「海上ヘリ基地」建設案は名護市民投票で示した市民意志を一切無視するものであり怒りをもって抗議するものである。また陸上案なるものは広大な自然破壊と事故や騒音などとてもない被害をもたらすのは火を見るよりもあきらかなことであり、いかなることがあっても認められるものではない。

建設予定の一つの候補地とされた東村高江区は16日に緊急代議員会を開催し「基地建設反対」を確認し区民あげての反対運動を展開することを決定した。同区は以前にハリアー基地建設を阻止し、昨年は海上基地建設反対

決議を行なつたいきさつがあり、政府の無神経な基地建設案に怒りの声が上がっている。さらにキャンブシューワーブ陸上案に至つては辺野古住民や名護市民を愚弄する暴挙であり、許されることではない。我々は、県民をはじめ県内外の環境団体、人権擁護団体、平和団体などあらゆる運動体と連携し、断固これを阻止する。

「軍民共用空港案」は県民を分断し軍事基地を何があんでも建設しようとする日米両政府の意に沿った策略であり、私たちは決してだまされない。

我々は、海上案であろうが陸上案であろうが、埋め立て案であろうが、更には「軍民共用空港案」であろうが、「ヘリ基地建設」には断固として反対であることを改めて表明し、北部地域への基地移設案を打ち出した日本政府に強く抗議すると共に、北部地域へのヘリ基地建設案をただちに撤回し、基地の県内移設を断念するよう強く求める。また、クリントンアメリカ大統領が来日するにあたり、我々はアメリカ政府に対し、沖縄県民が求めた基地の整理縮小に逆行し沖縄県民に新たな基地の重圧を押しつける海上ヘリ基地や陸上案等基地の県内移設を中止し、普天間基地を無条件全面返還するよう求める。

語りかけたいあなたへ 17

大里知子

N O M O R E 核実験

先日、インドで核実験を行なったというニュースを見ていて、姉（則子）は私に「こんどは、インドのものを買わないの？」と聞いてきた。

「インドのものは、買わないといっても紅茶くらいのもだから」と答えた。

こういう会話をしたのは、私が地下核実験をしたフランスのものを、買わないことにしているからだ。った。

フランスは、一九九五年九月に地下核実験を強行した。この地下核実験は、一九九一年七月以来四年ぶりで、通算二百五回目。

あんなに国際世論の反対を受け、全世界の人びとの注目を浴びたのにもかかわらず、なお核実験を続行した強気には、こちらも何かはつきりした態度で、強気な姿勢を示さなければいけないような気がして、私一人の「フランス製品不買運動」が始まった。

ブランド志向が人一倍つよい私は、それまではフランスものも「ピエール・カルダン」や「ニナ・リッチ」「クリスチャン・ディオール」などがデザインしたものを、好んで買っていた。ところが三年前フランスが核実験をした時以来、私の持ち物から「Paris」の文字が消えたのだった。

自分の国のものを、日本の一人の人間が不買運動をしているということは、フランスのほうは、わかるはずがない。それに、私一人が「フランス製品不買運動」をしたからといって、フランス経済に大きな損失が生じるわけではないことぐらいはわかっている。でも、こだわるところは徹底的にこだわってみるのも、大切なのではないだろうか。こういうことは自発的にやることであって、誰かにすすめられたり、すすめたりするべきことではないと思うから、周囲に、どんなにフランスの製品を買う人がいても、それはそれでしかたがないことだと考えている。

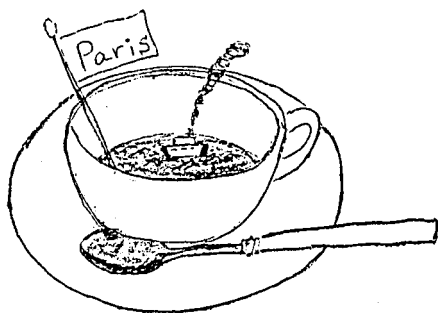
最近、前にも増して外出する機会がなくなつて、大抵の買物はカタログですませてしまうことが多い。誰かと一緒にカタログを見ていて「これ買おうかな」と言うとき「それは、フランス製品だから駄目」と、あべこべに言われてしまう。

私の「フランス製品不買運動」も、すっかり定着してきたようだ。

*

これを綴りおえた時、今度はパキスタンがインドに對抗して、核実験を行なったというニュースに、近い将来、核戦争が起こらないことを願うばかりである。

(一九九八・六・一五)



あこら読書室

ナショナリズムとジェンダー

上野千鶴子著

青土社刊

自分にとって「ジェンダー理論は profession であり、vocation である」という著者が、長年の理論構築の集大成として書き上げた本書では、ジェンダーを解き明かすために発見された巨大で頑強な社会システムとしてのナショナリズムが、戦争という「国家プロジェクト」の中で具現されていく姿を追いながら、克明に分析される。そして、ナショナリズムの下で正当化される「正義」の欺瞞をあばきつつ、国民国家の中にジェンダーがあつたことを指摘する。近代国家が数多く誕生していった時代に繰り広げられた幾たびかの戦争は「被害者」「加害者」

として人びとを分断したが、そこでの補償問題等を考える際も、著者は「フェミニズムは国境を越えるべき」と主張する。戦争の残した傷跡は深く、怨念にさえ変わっているため、そのエネルギーから沸き起るフェミニズムが国家の枠を越えられない現実を受け止めてなお、それを運命と諦めてはならないと主張する。

本書は三部構成で、第一部「国民国家とジェンダー」では、主に日本の戦時下体制の中で作り上げられていった「国民」「国民国家」とジェンダーとのかかわりを追跡していく。私たちの多くは、いとも簡単に「日本国民」の言葉に納得させられている。あたかもそれが自明のもの、つまり「宿命」であるかのごとくにである。しかし、これは「国民化」という近代プロジェクトによる国民国家形成の成果なの

である。

一九八〇年代以降、自立した市民社会を志向していたはずの近代化が役割の肥大化した巨大国家の崩壊を目前にしたことで揺らぎはじめ、「国民国家」は「脱自然化」され、相対化してゆく。つまり、「国家」は必ずしも『市民的公共性』を代弁するとは限らない。むしろ、市民社会とは、市民の自由な活動に対する国家からの干渉をできるだけ排除することを前提にしている（P25）ということが明白になってくる。そうなると、これまで人々によって信じられてきた「我が国」「信奉は、そのアイデンティティを求める心の裏に巧みに仕込まれていった政略であり、「国家化」は究極事態である戦時下において強化されていった（戦時動員体制）は兩次の大戦を通じて、連合国の諸国でも遂行された。むしろ戦争はこの「体制」の「革新」にとって駆動力となるべき

暴力的な契機であった(P21)ことがわかる。

こうしたナショナリズム分析がなされる中、著者は「国民国家」概念にジェンダーのメスを切り入れようと試みた。かつてジェンダーは、私的集団としての家族を正当化する性別役割論の矛盾を見破った。家族という私領域が国家や市場の論理に組み込まれていることから、国家や社会という公領域にもジェンダー化の必要性が求められるのは当然のことである。

人びとが「国語」「国文学」「国民軍隊」といったメディアを通して「国民化」されていくプロセスで、女性はいかに「国民」として念頭におかれていなかった。一九二五年の普通選挙法における「普通」は「日本臣民男子」のことであり、「男性の間に階級や民族を超えた平等な共同性をうち立てる代わりに(ために)、女性に

参政権を否認した(P29)ものを使っている。そして、女性の「国民化」が俎上に上げられるのは国家総動員体制となった戦争時である。著者は「女性の国民化」を近代から連続した未完のプロジェクトと解すれば、『戦争』が「国民化プロジェクト」課程の『逸話(anecdote)』などではなく、むしろそれを促進した『革新』であり、一種の『極限型』であったことをみとめないわけにはいかなくなる(P29)」と述べている。

「国民総動員体制」下でも、日本の戦略は性別役割分担維持(ジェンダー分離型)を押し通した。いわゆる「銃後の守り」として、次代の兵士を産み育てる母、軍神の妻は非常時の国を守るために生活改善という名の節約と供出に勤しんだ。しかし、著者はジェンダー境界の最終的解体として女子徴兵を取り入れた国民国家はどこにもなかったと言いつける。ジェン

ダー参加型の国家でも、女性兵士は「男性を範型につくられた」「人間」モデルの下で『二流の戦闘力』と扱われ、また「女性の再生産能力は『逸脱(ハンディ)』にかならず、『分離型』は女性を女性領域に閉じこめるが、参加型は女性に自らの女性性を否定させる(P89)」からである。つまり、「国民」は当初から女性を排除した「男性性」で定義されており、『女性の国民化』は「国民」と「女性」との間の背理を一挙に照らし出す(P91)。「個人」が「男性」を範型につくられているところでは、女性は「平等か差異か?」のディレンマに否応なく立たされる。だが、この二者択一はどちらをとっても女性にとっては異である(P94)。このように「国民国家」の枠内では、原理的に男女平等や女性解放が不可能であることが確認される。

著者は、第二部に「国民国家とジェン

ダー」の根底的な問題提起をするものとして「従軍慰安婦」を取り上げている。国民国家形成の中で際立ったジェンダーの象徴こそ従軍慰安婦にはかならない。しかし元「慰安婦」の韓国人女性三人の告発は、これまでの「従軍慰安婦」パラダイムを一八〇度転換する歴史的事件となった。これは「従軍慰安婦」が「犯罪」であったことを明らかにしたからである。

著者は「この問題は過去の問題ではなく、現在の問題なのだ、私たちが現在進行形で加担している犯罪なのだ（P100）」と述べ、「従軍慰安婦」のもつ三重の犯罪を次のように整理する。

- ①戦時強姦という犯罪
- ②戦後半世紀にわたるその罪の忘却
- ③被害女性の告発が否認される罪

「従軍慰安婦」の証言は、それまで「我が身の恥」として沈黙してきた事実を「被害」として定義し直すものである。こ

れらの背景には一九八〇年代以降の韓国内での民主化運動・女性運動の影響が大であった。そこでの女性たちによる告発が「強姦」は「被害者の恥」から加害者の「罪」へ（P102）にしたのである。

九六年四月、スリランカのラディカ・クマラスワミが国連からの依頼を受けて提出した「女性に対する暴力」の報告書によって「従軍慰安婦」は「性奴隷制」の一種とされ、日本政府には謝罪と補償の勧告が出された。同時期に発覚したボスニアでの「レイプ・キャンプ」が与えた衝撃は「武力紛争下の女性への暴力」の深刻さをいっそう明らかにした。これは武力下のみならず、日常的に起こる強姦や性犯罪など、すべて女性の性的自己決定権への侵害として性暴力パラダイムへ展開していく。

著者は「慰安婦」問題の背景にあるのは、国民国家と帝国主義、植民地支配と

人種主義、家父長制と女性差別、さらに「性の二重基準」がもたらす女性の間の分断支配をめぐる今日も続く抑圧（P142）」と述べ、「慰安婦」解釈の多様性と落差を指摘する。そして、「ただひとつの『正史』という考え」を放棄し、複合的・多元的な「さまざまな歴史」があることを認め、元「慰安婦」によって提出された「もう一つの歴史」を受け止めて何を発言していくかという。著者の問いかけは同じ痛みを共有するすべての女性たちに投げかけられている。

第三部の「記憶」の政治学」は著者のジェンダー史検証である。「慰安婦」問題は、九六年十二月に旗揚げされた「新しい歴史教科書をつくる会」による日本史教科書からの「慰安婦」記述削除要求で、現在の日本の論壇を二分した。この会の言説を暴力と言い切る著者は、それらの背後には「はっきりとしたナショナリズム

ムと大國主義』があるとして次のように述べている。『自己逆史観』からいいかげんに脱却して、自國に誇りを持てる正史を、というのが彼らの主張である。

一体だれのための、何のための『正史』なのか？『正史』はたつたひとつの正当化された『國史(national history)』を作りだすことで、『國民』のあいだにある多様性や対立をおおいかくす。〈中略〉彼らは愛國者きどりだが、誰が『より愛國的か』をめぐるゲームは『國民』と『非國民』のあいだに境界をひくことで、どのような恣意的な『肅正』をも可能にしてしまう。『國家』という『想像の共同体』への同一化の強制と誘惑こそ、わたしたちが避けなければならぬ異である(P15)。

フェミニズムが歴史を再審する課程で闘わねばならなかったのは、長きにわたって存在し得なかった女性たちの声の

歴史(オーラル・ヒストリー)をひとつの歴史として承認させることであった。著者は女性史が文書至上主義から出発し、多くの女性たちの『沈黙の声』をいかに語らせるかを課題としてきたことを指摘している。

ナショナリズムとは國民國家と個人の同一化である。この集團的同一化に潜む異は、例えば被抑圧民族のナショナリズムは帝國主義者のそれとは違つて正しいとされてしまう危険性である。著者は九五年の北京會議ワークショップで出された在日韓國人女性の「ナショナリズムはアジアのフェミニズムにとつて大事な問題だ」という発言に対し、フェミニズムが國境を越えるべきだとする根拠は、フェミニズムの目的が「わたし」を「國民」といったひとつのカテゴリーに還元するのではなく(もちろん本質主義的の共同性としての「女性」にも還元されない)、

ジェンダーや國籍、職業、地位、人種、文化、エスニシティなどさまざまな関係性からなる集合としての「固有のわたし」を前提にしているところにあると答えている。『慰安婦』問題が突きつける問いは、たんに戦争犯罪ではない。戦争が犯罪なのだ(P199)とする結論は、國民國家をジェンダー化(gendering nationalism)していく中、「國民國家」や「女」が脱自然化、脱本質化されるところから導き出されていく。

本の帯には「國民國家を越える思想」と付されているが、この本は著者のジェンダー理論集大成といえる。ナショナリズムが二十世紀世界の象徴であれば、それをジェンダー化して脱構築する試みは、國境を越えた思想的止揚を次世界に実現する。本書は翻訳され、世界へ紹介されるべき著作である。(石田路子)

(B5判 二三二ページ 一九〇〇円)

命を育む土地を

人殺しのためには使わせない!

阿波根昌鴻・伊江島のたたかい

教えられなかった戦争・沖縄編

上映時間 1時間52分／企画・制作 映像文化協会

この映画には監督はいません。私は島にあった写真をつなぎ合わせただけ。それをみんなで検討しました。

高岩 仁(構成・撮影)

画面いっぱい映し出されるのは夕映えの伊江島。富士に似た円錐形の小さな山が一つ。息をのむ美しさ。

小さな山のほかは広い平地。それゆえに日本軍の飛行場にされ、米軍の砲火を浴びる。そして米軍上陸、殺戮。

西田天香と内村鑑三に学んだ阿波根昌鴻さんが「沖縄にも思想と農業を学ぶ学校を」と伊江島に準備した農業学校は、完成を待たずに修羅場。

戦後、慶良間捕虜収容所から帰ってきた島の六割は米軍基地と化していた。

島人の生きる糧、残されたわずかな

農地に実弾演習の爆弾が射ち込まれる。その爆弾を解体してお金に換えようとした二人の屈強な男は、爆薬で惨死する。残された幼い子どもたち。爆死者の補償を求めると、「解体したのが悪い」。「それならなぜ射ち込んだ」。

ようやく得た生命の補償は千ドル。

「基地の外に弾丸を打つな」と抗議すると、米軍は、基地の範囲を翌日には被弾地まで拡大する。ようやく実った甘蔗畑は、無残に焼き払われる。

〔阿波根昌鴻・伊江島のたたかい上映予定〕

1月31日 相模原南市民ホール

2月20日 武蔵野公会堂

3月13日 立川女性総合センター・AIM

15日・22日 千葉市(詳細未定)

20日・21日 横浜駅前県政会館

◆自主上映の申し込みは映像文化協会へ。

TEL 045・981・0834
FAX 045・981・0918

アメリカは民主主義の国だと思ったが、やはり鬼畜だったのか。

——相手が鬼畜なら、こちらは人間になろう。阿波根さんの徹底した非暴力闘争が始まる。「米兵と話すときは、手を肩より上に上げるな」「言葉はできかぎりていねいに」「決して怒らない」。

一九五五年「食行進」、六六年メー
スB基地拒否……阿波根さんたちの運動は、千丈堤に向かうアリの群れのよう
に小さな穴をあけ続ける。

その間五十二年。阿波根さんは九十



毎年1万人が平和資料館で話に聞き入る

刻んだ阿波根昌鴻さんは言う。

「私たちの平和運動は、米軍基地を日本からなくしただけでは終わらない。平和憲法を世界に広め、地球上から戦争も武器もなくす。そして地球の資源をすべての人で平等に分け合える社会能力に応じて働き、必要な分だけ受け取れる社会を築くまで続けるのです」

新ガイドラインで、安保「日米軍事同盟をさらに徹底的に強化しようとする日本政府。それをくつがえせない限り、私たちヤマトの人間は、永遠に加害者であり続ける。周辺事態法の国会可決が急がれている。全国各地の、できるだけ多くの人に、何としても見てほしい。」

(千)

◆貸出し料は一回八万円。「教えられなかった戦争」には、マレーシア編とフィリピン編もあり、貸出し料はマレーシア編五万円、フィリピン編六万円。

五歳になった。車いす。両眼はほとんど失明。十五年前に建てた反戦平和資料館「ヌチドゥタカラの家」で語りかける。

「それから私たちは考える人間になったのであります」「鬼畜であるアメリカ人を教育するようになったのであります」「淡々と静かな阿波根さんの声が、ズシリズシリと心に響く。」

ヤマトは、日本本土は、娘を売って餓えを凌いだ昔の親のように沖繩を売

り、高度成長の快楽をむさぼり、基地は沖繩の生産手段を奪い続ける。その基地と振興策を抱き合わせにする日本政府も、また鬼畜か――。

沖繩の基地はインドネシア、フィリピンなどの民衆弾圧特殊部隊の訓練場でもある。基地とは何なのか。

二十代で米国支配下時代のキューバに渡り、資本の労働搾取を十年も骨身に叩き込み、マルクスと宗教を心深く

佐多稲子さん 作家という以上に、婦人

民主クラブの委員長として、女性運動にかかわる人びとの信望を集めておられた佐多稲子さんが、10月12日、94歳で昇天された。四、五年前まで、女性・反戦・

人権等の集会には必ず出席され、その周りには紫の光がただようなオーラを発しておられた。

「あごろ」14号のインタビューで伺って以来、〈あごろ〉にもいつも温かいまなざしを注いで下さった。ご病氣でも、生きていくだけだで嬉しかった大切な大切な方。ショックです。

大塚末子さん 誰でも簡単に着られて心地よい和服をと「和服革命」。「いいと思ったら慣習にとらわれなくていい」を貫いたフェミニストの大先輩。11月26日、96歳の天寿を全うされた。

久山英子さん 〈あごろ〉が財政難におちいった時、ボンと百万円も投げ出して

下さった俠気の方。小樽会議でのお姿を覚えていらつしやる方も多いでしょう。これからが本当の意味の女盛りという時に、悲しい。もったいない。残念です。

〔横田悦子さんが岡山市議選に〕

無党派層の要望を受けて四年前初当選。市の改革に力を尽くしてくださった〈あごろ会員〉の横田さん。今度は思い切って仲間と二人で立つ。無謀？それとも希望？岡山市の知人、友人にぜひ知らせてください。市場恵子さんはじめバックアップ体制も大張り切りです。

〔編集後記〕

◆新潟時代の白井博子さんは、まだ童顔の残る静かなひとでした。内に炎を抱いたひとでした……。新潟との二十年にわたる変わらない交流のなかで、白井さんと出会った方々に原稿をお願いしました。

非常に短い期間にもかかわらず、遠くからも心をこめて届けてくださいました。白井さんが結んでくれたこの「縁」を、あの笑顔といっしょに大切にしていきたいと思っています。合掌。

（新潟市・倉元正子）

◆「そういう口のきき方は、私は嫌いです」。物静かな白井さんが、たった一度、大きな声を出された日のことが忘れられません。「リブとは戦闘的なこと」と思う人の多かった時代。事務局にもいつも二、三人はそういう方がおり、私は困惑しながらも、「とにかくどんな人も受け容れよう」と思い続けていたのです。

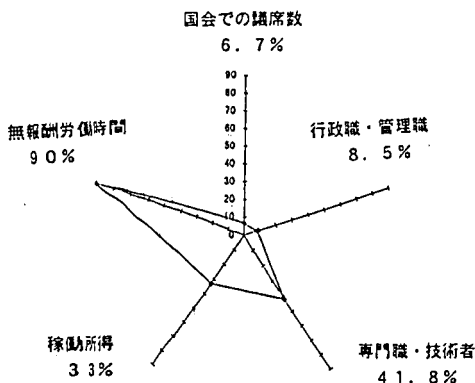
凛とした白井さんの大声に、一座はシーン。以後、ミーティングはずっと建設的になりました。

本当の礼儀正しき、本当に人を大切にすることを、私はその時教えていただいた。ありがたい方でした。

（千）

パネルディスカッション 無報酬労働を考える

！統計で見る日本女性の現実！



国内外のアンペイドワークの動向 清水澄子さん(参議院議員)
 農村女性のアンペイドワーク 篠崎正美さん(熊本学園大学教授)
 新しい公・共圏をつくる政策・制度 又木京子さん(神奈川ネットワーク運動代表)
 ◆ 白井博子さんが北京会議後に所属されたグループの報告集です。
 白井さんのご遺稿「アンペイドワークについて思う」掲載。

無報酬労働の数値化を考える会 編

(1997年度東京女性財団助成事業)

A4判88ページ 1,000円 お申し込みはBOC出版部へ

住所〒160-0022 新宿区新宿 1-9-4-303 TEL03-3354-3941 FAX03-3354-9014

あごら 245号 フェミニズムとは^{かぎ}限らないやさしさ ^{つよ}そして動き

●編集 あごら ●発行 1998年12月10日

●発行所 あごら MINI 編集部 〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-9-4

●TEL 03-3354-3941 ●FAX 03-3354-9014 ●振替 00100-0-5264

●定価 本体857円+税

この ひろい宇宙に
たった一つの地球
その 大きな地球に
たった一人のわたし
そして あなた

かけがえのない地球
かけがえのないわたし
かけがえのないあなただから
たいせつに たいせつに しよう
あなたも
わたしも
地球も

たった一度きりの人生だから
思いきり
のびやかに生きよう

だれもが だれをも
ふみしだくことなく
胸の底まで深く息をし
ああ 生きててよかったねと
ほほえみあえる地球にしよう

へあごら
人と人の出会うひろば
へあごら

人と人の共に生きるひろば



9784893060884



1920036008575

ISBN4-89306-088-0

C0036 ¥857E

女による女の BOC 出版部

〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-9-4

定価 本体857円+税